第3章 地震と人びとの想像力

本章では、地震が起こることにより、人びとがその心の中に、自分たちの生きる世界の 「像」をどのように形づくったのかをみるとしよう。ここにいう人びととは、おもに市井の 庶民をいう。日々の生活を繰り返すことをもっぱらとする人びとは、その生活を突如とし て中断させる地震が引き起こした出来事や事態を、いったいどのように受けとめたのだろ うか。地震は大地や社会にとどまらず、そこに生きる人びとの心をも揺り動かしたはずで ある。

安政江戸地震は、さまざまな人びとに、さまざまな経験をもたらした。たとえば、地震を恨んだり祝福したりした様子が、幾人もの観察者によって、実に多様な記録として、いまに残されているのである。そうした記録を通して、地震を体験したり伝聞したりした人びとが、地震という事態とその後の展望を、どのように心の中に描いたのかを、この章では再構成してゆく。地震をめぐる人びとの想像力を捉えてみよう。

第1節 さまざまな地震情報

地震をめぐる人びとの想像力を捉えるにあたって、まずは、地震をめぐる当時の情報についておおまかにみていくとしよう。ここでいう地震情報とは、当時の人びとの地震に対する考え方、心情などを現在に伝える記録をいう。これらの記録は、文字や図像など実に多様である。

地震情報とは? 安政江戸地震の地震情報は、現在の私たちが「かわら版」と呼ぶ(当時は「読売」と呼ばれていた)地震直後に流通した1枚仕立ての摺物から、地震後にしばらくの時間をおいてまとめられた冊子まで、さまざまな形態の記録として現在に残っている。それらは、地震による被害状況や、施行や、お救い小屋について報せている。あるいは、地震前後の怪異現象や、人びとの信心の諸相も記録されている。また、江戸の情報通の記録には、市井の細々とした地震後の世相が記されている。

いくつか代表的なものをあげてみると、笠亭仙巣の「なゐの日並」(『日本随筆大成』 新装版第2期24、吉川弘文館)、須藤由蔵の日記(『藤岡屋日記』三一書房)、斎藤月岑の 「武江地動之記」(『日本庶民生活史料集成』第7巻、三一書房)、仮名垣魯文などによる 『安政見聞誌』や服部保徳の『安政見聞録』などがある。





図3-1 『安政見聞誌』表紙(東京大学地震研究所所蔵)



図3-2 『安政見聞誌』扉絵(国立公文書館所蔵)

地震情報のトピックス さて、これらの地震情報に、江戸市中の被災状況が記録されたことは当然として、そのほかには、どのような情報が記されているのだろうか。たとえば『安政見聞誌』には、地震の予兆現象とでもいうべき出来事が記されている。それは井戸水の濁りだったり突然の湧き水だったり、あるいは磁石がその磁力をなくしたこと、そして鯰が釣れたといったことなどである(本章末コラム「佐久間象山の地震予知器」参照)。

『江戸大地震末代噺の種』には、挿絵入りで、新吉原の日本堤から浅草寺に走った発 光現象が記されている。新吉原の揺れはことに激しく、そのために裂けた大地から「白 気」が発して、それが当たった浅草寺五重塔の九輪が曲がったという。ここにはあわせ て、それほどの激しい揺れとなった新吉原の娼家の被害状況も載せられている。

また、なぜ地震が起きるのか、という問いも人びとの関心事で、この『江戸大地震末代噺の種』や『安政見聞録』には、「地震の弁」として、地震発生の要因となる地中の構造や陰陽の気の乱れについて記されている。

さて、『安政見聞誌』の表紙をみよう。『安政見聞誌』という表題の上の方に、「万歳楽」との文字が記され、それを囲む意匠は鯰の姿にみえる(図3-1)。「安政見聞誌」の上巻の表紙をめくった扉絵にある歌川国芳の自画像には、鯰の姿が重ね合わされている(図3-2)。『江戸大地震末代噺の種』はその表紙に、刺ぐりしい鰭と歯をみせる鯰を描いている。また安政江戸地震の前年に起きた東海地震、南海地震の記録である『地震世直草紙』にも、その表紙に鯰とそれを押さえる瓢箪が描かれている。これらの記録にみえる鯰は、いったい何を表しているのだろうか。



図3-3 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「老なまづ」 (東京大学総合図書館所蔵)

またまず 常磐寿無事大夫直伝

そもそもなまづのあれたること、ばんしやくにおされ、諸々八方のわざ八ひ、数半人の見ごりをなして、古今のうれひをます、しゆんの時候のいかりのとき、てんに八かにかきくもり、大地しきりにゆりしかバ、くらとかべをふせんがんと、小やぶのかげによりたまふ、此おりまちまち、はいほくとなり、ねだをおり戸をかさね、おのがのきばをふさぎて、そのはりをもたささりしか八、むざとさいごと入寂のおわり、むだ死たまひしより、なまづをあやふと申とかや、かやうにすで、かき間違に身を悔ふ覧のうれひをバ、きミのなさけでおすくひの、衆の五合ふるかべの、ほこりたへせぬ、天空地ごく、どうどうどうと、ミくらのつちに、うたるゝものこそせつなけれ

安政二乙卯年十月二日

新吉原町仮宅場所付 浅草之分

- 一 東仲丁 一 西同 一 花川戸丁 一 山の宿 一 聖天町 一 目瓦丁
- 一 山谷丁 一 今戸丁 一 馬道 一 田町 一 深川仲町

深川

- 一 永代寺門前仲丁 一 同東仲丁 一 山本丁佃丁 一 松村丁 一 八幡御旅所門前丁
- 一 続御舟蔵前丁 一 八郎兵衛屋敷 一 松井丁 一 入江丁 一 長岡丁 一 陸尺屋敷

一 時 / 鐘屋敷 一 常八丁 げい者 おめにかけます軽わざハ、野中の一本すぎてござります なまず 七分三分のかね合かね合

鯰のデザイン 安政江戸地震の翌朝には早くも、仮名垣魯文の文章と河鍋暁斎の絵になる 1 枚の摺物がつくられた。この「老なまづ」(図3-3)と題された摺物は大評判となり、数千枚が売れたという。魯文はこのほかにも摺物に文章を書いて、それらはどれもよく売れ、魯文は「鯰のため」に思わぬ儲けを得たといわれた(野崎左文『仮名長古』)。ここに記された、「そもそも鯰が荒れ、磐石に押され諸々八方の災い……」と始まり「天変地獄どうどうどう、と蔵の土に打たれるものこそせつない」と終わる文章は、歌舞伎で知られる語りと唄の「老松」のもじりである。「安政二乙卯年十月二日」の日付をもつこの文章は、その日に起きた安政江戸地震についての語り物となっている。ここに描かれたのは鯰といっても、それそのものというよりは、鯰の髭がついたひとの姿にすぎない。だがこの後、鯰を主題とした錦絵版画が大量に江戸市中に出回るのである。

鯰を主題として地震発生とその後の世相を描いた摺物は、地震鯰絵と呼ばれる。地震 鯰絵で「老なまづ」のように、絵と文ともにその作者がわかる場合は稀有な例で、地震 絵鯰はその作者も発行の日付も記されていない摺物である。また商品であるにもかかわ らず、地震鯰絵にはその値段も版元の名も記されていない(本章末コラム「メディアと してのかわら版」参照)。



図3-4 地震鯰絵「鹿島要石真図」 (埼玉県立博物館所蔵)

鹿島神と地震鯰と要石 この地震鯰絵は、鹿島神が地震を起こす鯰を要石で押さえるという民俗や伝承に基づいている。たとえば、「鹿島要石真図」(図3 - 4)という地震鯰絵をみよう。そこには、鹿島の地にその表面だけを現した要石がみえ、そこから伸びる吹き出しの先に、鹿島神が鯰を剣で押さえている光景が描かれている。画面手前に描かれたこの光景が、要石の説明となっている。すなわち、要石は地中の奥深くにまで埋まっていて、その深部で地震を起こす鯰を押さえ、その呪力を持った要石を駆使するのが鹿島神であるというわけなのだ。

地震鯰絵とは、鹿島神と地震鯰と要石を、その構成の基本要素としている。しかし、この絵のように鹿島神が地震鯰を押さえるときに剣を使っていたり、あるいは、地震鯰が瓢箪で押さえられていたり、という絵柄もある。たとえば、地震鯰を押さえるのが瓢箪となると、つるつるすべる瓢箪では、充分には地震鯰を制御しきれない、という意味にもなる。また、鹿島神に代わって七福神の大黒や恵比寿が現れる地震鯰絵もある。当時、この類の摺物が数百種つくられたというが、そのうち現在に残るのはおよそ 200 種である。

災いでもあり福でもある このように地震鯰絵には、地震を起こすとみなされていた 鯰が描かれているのだが、この鯰は、地震を起こし人びとに被害をもたらす災いの根源 とだけ考えられているのではない。その反対に、地震が起きたことで富がもたらされた となれば、その地震を起こした鯰は人びとに福を与えたこととなるのである。たとえば、この「鹿島要石真図」をみると、鯰のまわりには、材木といった建築資材、金槌や 鉋などの大工道具、それらにくわえて小判が散らばる光景が描かれている。ここでは、富をもたらす地震は、それを享受できる人びとにとっては福となったというぐあいである。

このように、地震鯰絵には、災いと福との両面として地震という出来事とその後の事態が表現されているのである。

地震とは、せいぜいが数十秒の揺れとなって現れる自然現象である。だが巨大な地震ともなれば、余震や、地震が起きたことによって日常生活が激変するなど、その後もさまざまに、社会に甚大な影響を及ぼす。それを体験したものは、地震という出来事についても、その後に引き起こされた事態についても、それを理解し、なんとか受け止めようとする。そうしたときに、これまでに何世代にもわたって、くりかえし蓄積されてきた生活経験としての民俗や伝承が呼び起こされるのである。

想像力の結晶 19 世紀の半ばに、江戸では風刺画が流行していた。その当時繰り返される地震の最後に安政江戸地震が発生した。そのとき大量に作成された地震鯰絵は、鹿島神が地震鯰を要石で押さえるという民俗伝承を図像にしたものである。地震鯰絵とは、地震とそれが引き起こした事態をどのように理解するのかをめぐる、いわば想像力の結

晶である。そこに描かれた世界はただの空虚な虚構なのではない。たとえば、さきにみた「鹿島要石真図」に大工道具や大量の貨幣が描かれていたことが、地震後の家屋建設などをめぐる好景気に大工や左官などの職人層が利益を得たという事実の表現と読めることや、あるいは、地震鯰絵の中には被災した死者の鎮魂が描かれているなど、現実を反映した表現がみられるのである。

地震鯰絵を読む4つの視点 これから、4つの視点から地震鯰絵を読むとしよう。

1つは、地震が災いではなく福と受けとめられた様相を地震鯰絵の中にみて、さらに地震が起きたことを祝福するような状況から、どのように再び日常の生活を取り戻そうとするかの訓示を、地震鯰絵にみる。

2 つは、たとえ地震を福と受け止められる人びとがいたとしても、地震により人びとが死傷したり家屋が倒壊したりしたこともまた、まぎれもない事実である。地震後に再び日常生活を取り戻すためには、特にこの死者をどのように遇するかが重要となる。それを地震鯰絵から読む。

3つは、この安政江戸地震を、当時の時代の中において考えることである。この安政 江戸地震は日本列島で繰り返される大きな地震のひとつであったし、またこの時期は、 ペリーが来航するなど国政も大きく揺れた時代でもあった。そうした時代の様子が、地 震鯰絵の中にどのように表現されているのかを読む。

4つは、人びとの信心をめぐる様子を地震鯰絵の中に読む。地震鯰絵の多くは、荒ぶる地震鯰を押さえる神として鹿島神が描かれている。この信心は、遠い過去に遡ることのできる民俗伝承に基づいていたのだが、現実に地震が起き、それが深刻な災害を引き起こしてしまったという事実を曲げることができないとき、この鹿島神への信心も揺らいでしまうのである。こうしたときに、どのような神々が災いをめぐる救済神として現れるのかを、地震鯰絵の中に読むとしよう。



図3-5 地震鯰絵「平の建舞」 (埼玉県立博物館所蔵)

たひら の たてまひ 平の建舞

貧福を ひつかきまぜて 驚らが 世を太平の 建まへぞ寿類

第2節 世の再生と日常

地震鯰絵は、震災からの復興や被災者への救済、すなわち、地震が起きた世の再生を表現している。ここにいう再生とは、安政江戸地震の当時は、「世直し」あるいは「世直り」という語で表現されていた。まずは、世の再生における地震鯰の役割を、地震鯰絵の中にみるとしよう。

地震が世を均す 「平の建舞」(図3-5)と題されたこの地震鯰絵は、貨幣がまかれた大地に、大きく黒々と太書きされた「平」の字が建てられようとする場面を描いている。この建立に向けて作業をするのは、小鯰たちである。その傍らには、七福神の一員である大黒もいる。

絵に記された文字は デー文字 「貧福を ひっかきまぜて 鯰らが 世を太平の建前でする」。 地震を起こすのは鯰ではあるが、この絵の中では、鯰は震災という災いを人びとにもたらすのではなく、地震をきっかけとして人びとに富をもたらす福の担い手として登場している。 しかもこの小鯰たちは、大工などの職人の姿をしている。 ここにみえる貨幣は、そうした職人層に施されるということなのだ。

鯰が起こした地震により、地震後の社会は建築をめぐる好景気となった。この好況を得た大工などの職人層は、もとより貧しい庶民に属する。だが、地震は貧富の差を平に均すきっかけとなり、それにより人びとがこの世の太平を謳歌できるようになった。それは、地震を起こした鯰のおかげなのだ、とこの地震鯰絵は表現しているのである。

地震は社会に破壊をもたらす。だが、震災の渦中に、あるいはその後に、住むべき家があちこちで建てられるために仕事の注文が増えるので、大工などの職人層にとっては、 地震を福と受けとめることができたとなる。このように、地震や、それを起こすという 鯰は、災いであるのだけれども、別な側面からみると、福をもたらすと、地震鯰絵の中では表されているのである。

地震鯰絵には、その構成要素の基本となる鹿島神 地震鯰 要石のどれかが、別な何かに置き換えられることがある。この地震鯰絵の場合は、鹿島神ではなくて大黒が描かれている。地震鯰が災禍をもたらすのでなければ、それを鹿島神が要石で押さえる必要もなく、どちらも登場しないこの地震鯰絵の中では、小鯰たちは福神である大黒の指示に従っている。すなわち、小鯰は福神の手代となっているのである。



図 3 - 6 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「世八安政民之賑」 (東京大学総合図書館所蔵)

世八安政民之賑

それ、人げんの五道をまもるも、神仏のおしへなるに、その道をわすれ、貴せんともに、おそろしきいましめの欲のミちにいりしゆへ、下はんミんをすく八んと、神や仏のさうだんにて、鹿嶋の神へおたのミゆへ、かしま太神宮かなめ石をなまづにしバりつけ、世のせいすいをなをすへしと、ありけれバ、なまづ八かしこまつて、安政二年十月二日夜の四ッ時、おん神のおつかひなりと、江戸をはじめとし、凡十里四方あれちらせバ、家をたをし、地をわり、出火することおびたゝし

金持ちども

サアサアサア、たまらぬたまらぬ、このじしんでハ、せつかくためた金も、千両ばこがこハれて、火事でやけてたねなしになる、アトなさけないじしんだ、どふしたらよかろふ、にげるにもにげられねへ、アトアトアト

ざとう

さてさて、大きなじしんだ、信州や大坂八、大へんにゆつたけれとも、江戸八あんしんだとおもつたが、これで八たまらぬ、アヽ、 あれあれ家がつぶれる、かべがおちて見へない、めの中へすながはいる、何しても、金八どごへいつた、つへもおれた、かなしひ かなしひ、めがあきたい、アヽアヽアヽア

なまづ

ヤアヤア、金持ちのぶげんども、そのほかさとうにいたるまで、よくきけ、われこれまで、すこしうごけバ、まんざいらくなどゝ、おのれおのれが身のようふじんをするも、欲ばつているからのことだ、世かい中その大よくが、貴せんのしやべつなく、 じるしにさへなれバ、出きぬことも、できるやふニなるうき世になつたから、か八いやびんぼう人八、年中くるしきどうし二くるしんで、いつまでたつても、よくなるといふことがねへ、金もち八、うぬらが金のあるをはなにかけ、町人でゐながら、さむらいのかぶをかつて、銭を出して人につとめて、もらひふちをとる時八、うぬらがつとめたやふに、内へた八らをつきあげて、大きなつらをしてゐる、これきんなるくぬすびとゝいふ、それゆへ二、神仏のおいかりつよく、こんどせかい太平二せよとの、天からのけんめいなり、おどろくななげくな、金もちども、きなじごうじとくなるぞ、これぞ下々あんおんのへいきんだア、さ八ぐなさ八ぐな、ぐわたぐわた、びしびし、めりめりめり

鯰と金持ち、どっちが勝つか? 貧富が換されるためには、金持ちの貯め込んだ富が社会に放出されなくてはならない、と告げる地震鯰絵がある(図3-6)。「なまず」「金もちども」「ざとう」の3者が登場する「世八安政民之脈」という1枚をみると、鯰と金持ちとが首引きをしている。

首引きとは、向き合うふたりが首に掛けた輪にした紐を、互いに引き合う遊戯である。この絵の中では、首に掛ける紐が鯰の髭になっている。鯰はすでに要石を背負わされている。金持ちは千両箱を押さえて踏ん張る。持つ杖の折れた座頭はひっくり返る。力の競い合いである首引きは、それを行う両者が対抗関係にあることを表している。世を再生しようとする地震鯰と、富の放出を押しとどめようとする金持ちとでは、いったいどちらの力が強いのか、という問いの表現でもある。

この絵の中では、画面の右上に大きく描かれた鯰の方が優勢である。左下の金持ちは、「せっかく貯めた金も、千両箱が壊れて火事で焼けて種無しになる」と嘆く。左上でひっくり返る座頭も「家が潰れ……壁が落ちて見えない」「目の中へ砂」が入ってみえず、「金八どこへ行った」と悲しむ。

地震鯰によって苦しめられる者の代表として、ここでは金持ちと座頭が描かれている。 化政期から幕末にかけては、江戸の多くの座頭が高利貸業を営んでいたという。座頭も 金持ちなのだった。

金持ちを懲らしめている今回の地震は天が下した罰なのだ、とこの絵の中で地震鯰はいう。欲がはびこる浮き世を神仏が怒り、「世界太平」にせよ、との天からの厳命がこの地震となり、金持ちに向かっては自業自得と戒め、下々の庶民には「安穏の平均」の世になると告げられた。ここでは、鯰は鹿島神が庶民を救うために遣わした使者で、鯰が地震を起こすことで世の盛衰を質すとみなされている。

地震を起こす鯰はその荒ぶる力ゆえに世を壊滅しかねないのだが、絵の中では要石を 背負わされているがために、その力も世の再生へと制御されているというわけだ。

そもそもこの地震が起きた年は、安政 2 年 (1855) だった。庶民が安心する政治を行って初めて、治者もその地位を安泰とすることができる、との意味を籠めて用いられた新しい元号としての「安政」への改元から、わずか 1 年というときに起きた大地震だった。そうした時代の解釈も、地震鯰絵の中では表現されているのである。

天からの罰が下り、貧富が均されて、天下太平が実現したのならばまさに「世八安政」。



図3-7 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「あんしん要石」 (東京大学総合図書館所蔵)

あんしん欝石

<u>としより</u> なむかなめ石大明神、此たびの大へんのがれまして、ありがたふぞんじまする、私ハモウとしより、ことで ござりますから、ながくいる心もごさりませんが、シカシゆりつぶれ、ひがうなことでもござりましてハ、人のそしりをうけるが、くやしふござります、どふぞ、モウニ 三百ねんいきているうち、ぢしんのないやうに、お守り下さりまセ、きめう てうらいきめうてうらい、かなめ石様かなめ石様かなめ石様

大工 わたくしのおとくひから、ワレきてくれ、ヤレこいとやかましいので、きちかいのやうになりました、どちら様もおとくいでござりますから、いづれも、よろしくいたし上たい心でござりますれ共、どうもからだか、つゞきません、なにとぞ十人まへも、はたらくからだに成様二、御まもり給へ、かなめ石大めうじんかなめ石大めうじん

医師 此たびのさ八ぎにて、手あしをけがいたし、れうぢにまいる人が、山のごとくで、わたくしほねをおり、れうぢいたしまするが、日かつがかゝりまして八、手がま八りかねますから、早くなおり、手ばなれいたすやう、守らせ給へ、なむかしまかなめいし、きめうてうらい、きめうてうらい

[後略]

「あんしん」への欲望 ひとの欲望や願望とはどれほどのものなのだろうか。それを、要石に向かって群集が手を合わせて願掛けをする光景を描いた地震鯰絵の中にみよう。 それは、「あんしん要石」(図3-7)と題された1枚である。

地震後の好況により儲けを得た職として描かれる大工の願い事を聞こう。大工は、「お得意様からたくさんの催促があり、気が動転するほどの忙しさとなりました、これではからだが持ちませんので、10人分も働けるようなからだにしてください」と要石に向かって願う。もとより、現実世界では10人分もの働きをひとりのひとができようはずもないのだから、これは、自己の力量を超えたところに定められた願望である。それほどの力量を得て、充分に儲けようとの願いがここに現れている。

地震鯰絵の中では、世を大きく揺るがした地震からの復旧に止まることなく、文字通りの復興が望まれているのである。復旧ならば元の通りに戻るということだが、復興とは元の状況を超えた繁栄の獲得を意味している。地震鯰絵では、まさに世の再生というにふさわしい世界が、表現されているのである。



図3-8 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「万歳楽鯰の後悔」 (東京大学総合図書館所蔵)

まんざいらくなまづ こうくわい 万歳楽 鯰の後悔

サア、みんなこいこい、コレおやかた、おいらたちが大ぜいでそろてきたの八、ほかでもねへ、さんぬる十月二日の夜、かね八うへのかあさくさか、四ツをあひづのおめへのはたらき、コレよくきけよ、おいらたちがあんのんに、ひげをのバして、ぢのそこに、すまひをするも、にんげんさまが、三どのしよくをめしあがつた、そのつゆしるのしたゝりに、はらをこやしてゐれバこそ、へをひるさへも、もしひよつと、せかいへひゞくこともあらうと、すかしてしまふが、なかまのぎぢやう、それほどまでにごおんのある、人げんさまへおなげきや、いくそばそば、そのごなんきを、かけたむくひ八、をぐるまの、ま八りま八つてこちとがミのうへ、人げんさまのおはらだちに、つくひしかたのとぶなまづ〔中略〕

大なまづハ、あたまをおさへ、アヽこれこれ、あやまつた、こんど八まぢめに、いひわけする、なるほど、ミんなにいハれて見れバ、いまさらめんぼくなくばかり、どうしてあんなとんまをやつたか、わがミながらも、わけがわからぬ、それについても、めてへらまでゐどたち、どをうしな八せ、はらもたとうが、れうけんしてくれ、そのかハり、こんどのことのうめくさに、人げんさまへ八、こくどあんおん、こゞくをミのらせ、第一金がまうかり

一 かないわがうし 一 いのちながく 一 むびやうそくさい

そのほか、をとこに八女がほれ、女に八をとこがほれる、おんまじないをいたし、さしあぐれバ、どうぞ、れうけんしてくれと、あやまりへいかうしたりけり

大鯰、謝罪せよ! ただし、鯰は世の再生を実現して福を招来させるとともに、地震を起こして社会に破壊をもたらす災いの根源でもあった。「万歳楽鯰の後悔」(図3-8)という地震鯰絵の中では、そうした地震鯰の両面性が、大小二様の鯰として表されている。絵柄は、7匹の小鯰が親方の大鯰を打ちたたいているとなっている。記されている文字をみると、そこでは小鯰と大鯰の対話が展開している。

小鯰がいうには、鯰が地の底で安穏と暮らしていられるのも、人間が食べる3度の食事の余りを得ているからだ、それほどにご恩のある人間に難儀(震災)を掛けたからには、その報いを受けなくてはならない、と大鯰を難詰する。

すると、大鯰はこの地震のお詫びとして、国土安穏、五穀豊穣、金運成就、家内和合、 男女和合、無病息災、長久長命を祈願すると陳述した。深刻な震災をもたらした鯰であ るがゆえに、それが叶えるという人びとの願望も、家族や男女の睦まじさや、無病で健 康に暮らしたいというように、より根源から、そして、五穀豊穣や国土安穏というよう に、より広範に、人びとの生活を安定させる領分に向けられている。

そもそも「万歳楽」とは地震除けのでいい言葉であるとともに、安楽や快楽を謳歌する祝い言葉でもあった。地震とは、それが破壊や死傷といった震災をもたらすのだから、ほとんどの人びとにとって災いであったのだが、他方で、地震後の好景気や施行や救済といった事実をふまえてみれば、それを太平や平等の世への再生と受けとめられた者たちにとっては、幸いや福が与えられたきっかけとなったのだった。



まち ちゃうしゃはら 持 長 者腹くらべ

これ八これ八、貴公方八方腹(を、面)っと流ほとあつく、さすが大腹(や)でござらつしやる、さてさて、おうらやましひ事じや、愚老など八うんといきばつたところが、このくらひなことゆゑ、まことにおはづかしうそんじます、そのくせ、けつししやうでもござらぬが、ごぞんじのあほうめに、〈ひふ〈ミので、腹中はとんと浅間にあいなりました、イヤそのせいかして、おりおり、ぶりぶりとふきだしますて、八、、、、、、

イヤ、しやれしやれ、おもしろひごきぜんでござる、おたがひに、かやうなとき、まづしき人々に、あ八れミをたれかけまする八、やつはり、子孫 長 久 のこやしとなり、まつた家はんじやうの、よいたねをまくのでござります

図3-9 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「持 長者腹くらべ」 (東京大学総合図書館所蔵)



もちまる でふね 持丸たからの出船

持丸 ア、、せつねいせつねい、せつかくつめて、ひろいためたのを、いちどにはくとハ、ばかばかいい、なんのことだ、かうゆふことなら、いままでつかへバよかつた、ゲイゲイゲイ

なまづ モシ、たんな、あなたふだん、あんまり下方の者を つめて、なんぎをさせるから、このよふな、くるいいおもひをなさ るのだ、これから心をなほして、ぢひぜんとんをなさるが、よろし ふござります

ひろいて これこれ、てまへたち八、そんなによくばるな、まだまだゆつくりひろつても、たくさんだ、いゝかげんにして、かりたくへ出かけたがいゝ、ヲヽ、そふよそふよ、ひろいためて、ぢしんにひどいめにあうといけねへから、仮宅へいつて、つかつてしまふほうがいゝ、諸方へのゆうずうになるから

図3-10 地震火災版画張交帖 地震鯰絵絵 「持丸たからの出船」 (東京大学総合図書館所蔵)

長者の腹に貯まった富 さて、地震鯰絵の中には、世の再生に向けての富の放出が、金持ちの嘔吐や排泄として表現される型がいくつかある。世の富が均されるには、それを持つ者から持たざる者へと富が移らなくてはならないというのだ。そうした画像には、これまで貯めた金を口から吐き出し、あるいは尻から金を排泄する金持ちが描かれていて、その中で、金持ちの背を撫でさすって、または、腰を踏みつけて、彼らの嘔吐や排泄を促す鯰が描かれる場合がある。ここでも地震鯰は、世の再生への推進者として描かれている。

3人の金持ちが貨幣を排泄する地震鯰絵には、「持 長者腹くらべ」との題がつけられている(図3-9)。持 とは、 = 丸 = 金、すなわち金持ちである。彼らがかわすのは、「お互いにこのような災害時には、貧しい人びとに憐れみを掛けますと、やっぱり子孫長久の肥やしとなり、また家内繁盛のよい種をまくのでございます」という会話である。地震後の世では、金持ちたちによる富の放出という施行が広く望まれているのだが、それもいわば情はひとのためならず、まわりまわって金持ち自身の子孫長久、家内繁盛につながるのだ、とこの地震鯰絵の中では説かれている。

世の富が均されるために、ある特定の層に限られる過度の蓄財が戒められる。富を放出することは、子孫長久や家内繁盛にくわえて、それは積善の表れでもあると勧められ、金は融通し合うべきもの、富とは広く社会に循環すべきもの、と地震鯰絵が発信する訓示には説かれている。

やはり貨幣を嘔吐する持丸とその背を鯰がさすり、職人たちが争って貨幣を拾う場面を描いた地震鯰絵がある(図3-10「持丸たからの出船」)。絵には貨幣を奪い合う職人たちの争いが描かれているのだが、文字で記されたその台詞をみると、「これこれ手前たちはそんなに欲張るな、まだまだゆっくり拾ってもたくさんあるぞ」と、その争いを諫めているのである。そして、「諸方への融通」になるようにと、蓄財ではなく、男たちに吉原での散財を勧めている。地震後の好況で生活が潤ったという職人層に向けても、蓄財という個人の欲を抑えて富が諸方融通となるようにと、地震鯰絵は説いているのである。



図3-11 地震鯰絵「大鯰後の生酔」 (河鍋暁斎記念美術館所蔵)

大鯰後の生酔

わらひ上戸の方 儲連中

大工 こんどぢしんで、金もふけ八、おらたちといふが、たき大工ちやア、たかゞしれてる、ほんとふハ、とふりやうたこかた、口銭のま八りかいい計さ、サアはやくしまつて、立場でまたけつろふぜ

ざいもくや こんとかねもふけ 引たの八、さいもくやのざかしらた、といふひやうばんだア、なに ねへ こんなうりきれた かハらや おいら 八つまらねへ、是からこけらがい」と、以前せけんに、ことなかれた、かハらないと、いふつちやう 左官 こんどハ、出入中かいちどきたから、とうによつたふなのやうで、仕事がこてこてあつて、めのまハるやうだから、手間を上たら、たなわかいしゆや、子ぞうが、へたへたあらうちをするなりハ、おさんとんが、おしろいを付るやうだ 〔後略〕

世相を二分した地震 「大鯰後の生酔」(図3-11)という地震鯰絵は、その画面中央に巨大な類板の上でひっくり返る地震鯰を描き、その喉元には鹿島神が刀を刺している絵柄となっている。鹿島神により地震鯰はしっかりと押さえ込まれ(ここでは要石ではなく刀が用いられている)、従って、震災を含む地震という事態がすでに過ぎ去ったことを表している。するとそこでは、人びとは大きく、「儲け」を得た「笑い上戸」と「おあいだ」(ひま)になった「泣き上戸」の連中にと二分割されている。

儲かって笑いがとまらないという材木屋も、しかし「今度、金儲けをしたのは材木屋の産頭だけだという評判だ」と不満を述べる。同様に大工も、「儲かったというがそれは高が知れている、本当に儲かったのは棟梁だ」との憤懣を吐き、「さあこうした賑わいもお終いにして、また現場で働こう」と仲間を促す。儲かったとはいえ、それはいわば職人を差配する層に潤沢だったのであって、下々の職人はやはり勤勉に働かなくては、地震後の世を生きてはいけないということなのだ。

材木屋も大工もともに多くの地震鯰絵の中では、震災景気に儲けを得た連中として描かれ、それはまた地震後の現実の事態をふまえた表現となっていた。実際に地震当夜ただちに、幕府は物価統制、職人手間賃統制を江戸市中に触れていたのだから、ここからは手間賃の高騰を喜び賑わう職人層の姿をみることができよう。また、江戸市中に設けられたお救い小屋での施行を通して、貧民たちも普段とは異なる生活を過ごすこともできただろう。

そうした現実にみあうように、確かに地震鯰絵の中には、貧富が平均された太平の世という理想郷が描かれて、地震後の世の再生が表現されていたといえる。くわえて、国土安穏までも展望するような世の再生への活力が動員されてこそ、甚大な被害からの復興も望み得るというような、人心の鼓舞という役割が、この地震鯰絵というメディアに籠められていたのだった。

だが他方で、富をめぐって、持てる者には善と徳を、持たざる者には勤勉をといった 規範を説くこともまた、この地震鯰絵からの発信となったのだった。



図3-12 地震鯰絵「命しらずのごう欲」 (埼玉県立博物館所蔵)

命しらずのごう欲

安政二年卯十月二日夜四ツ時より、に八かに大地しんゆり出し、江戸四里四方大はんつぶれ家となり、わがよくにはなれにげいだし、いのちのつゝがなきものと、またごふよくにて、つねづね、人をなやめ、高利をむさぼり、にんめんぢうしんのもの八、かねにめをくれ、こゝろをのこし、いのちをすてるものもあり、これはぢならずや、つねづね、こゝろをせうぢきにもち、小よくなれバ、天災とてもいのち八、たすかるものとぞ、おそるべし、おそるべし、おそるべし、おそるべし、おそるべし、おそるべし

だんな八よくばりだから、しんでもいゝ、わたしのいのち八、たすけてほしい、万才らく万才らく万才らくきものもくしもいらない、いのちがほしい、いのちがほしい、いのちがほしい

持丸 かねがほしい、かねがほしい、かねがほしい、いのちがなくても、かねがほしい、たすかることなら、いのちもほしい

強欲者への懲らしめ もう 1 枚、「命しらずのごう欲」(図3-12)という地震鯰絵をみると、そこでは、倒壊した家の梁に敷かれ、火炎も迫る中で貨幣を放さない強欲者が描かれている。地の文は、「強欲にて、常々、ひとを悩ませ、高利をむさぼり、人面獣心のものには、命を捨てるものもあり、これは恥ではないか」と書く。続いて、「正直な心を持ち、小欲であれば、たとえ天災といっても命が助かる」との訓告を記しているのである。ここでも地震鯰絵は、正直や小欲といった道徳を説くメディアである。

まとめ 世の再生を実現したりそれを展望させたりする者は、救済神(福)にほかならない。地震鯰絵の中では、それは鹿島神であり、また神の使者としての地震鯰にその役割が担わされていたのだった。くわえてその者たちは、人びとに日常の規範を説くいわば道徳の教師でもあった。

地震鯰絵は、世の再生への期待を受けとめ、また、そうした世への転換へと人びとを動かすメディアであったとともに、他方で、徳や善、あるいは勤勉や慎みや儀しさといった規範を説く読みものでもあった。日々の生活において広く人びとに望まれる規範を記しそれを説くことによって、震災から日常への回帰を図ろうとする手立ても地震鯰絵の表現だったのである。



図3-13 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「ぢきに直る世」 (東京大学総合図書館所蔵)

ぢきに直る世

よくもよくも、おもひのうちでハ、ハたしがてひしゆとこともを、よくをころしだ、これから、ハたしもころしてもらひにきました ハ

ヘイヘイ、まことに申八けもござりません、ヘイヘイ

第3節 震災と鎮魂

家族を震災により喪った遺族、そして死者そのものの姿や声も、地震鯰絵には描かれ記されている。そこでは、「世直し」や「世直り」といった地震後の世の再生を表した地震鯰絵とは異なる光景が展開する。

さきにみた地震鯰絵(図3-7参照)では、地震によって儲けを得た者として医師があげられていた(すなわち彼にとって地震は福となる)。そこで医師は、治療に来るひとが山のごとくとなったので手がまわらない、医師の手を煩わせなくとも自然と治るほどの治癒力を要石に願っていたのだった。では、死傷者を前にしたとき、治療を行うものはどのように描かれるのだろうか。

傷ついた人びと 被災により負傷した人びとを治療する場面が、「ぢきに直る世」(図3-13)と題された地震鯰絵に描かれている。ここでは、この場の奥に鎮座する鹿島神がまるで医師のようで、その指示に従って働く看護士かインターンのような役割を、小鯰が担っているように表現されている。

地震後の江戸市中では、現実に骨接ぎなどの業種は儲かったし、地震鯰絵をみれば、そうした職業の人びとの儲けが記されている。この地震鯰絵は、「骨折などの負傷はすぐじきに治るよ。」と被災者に告げていて、同時に、この地震は「世直り」という世の再生をじきに実現する、との啓示も示しているのである。地震はやはり災いにほかならない。だが、怪我もすぐに治るのならば、それは大きな災いとはならないし、世の再生が現実のものとなるのならば、それは福にちがいない、というわけだ。

だが、この絵は、そうした福をもたらすという表現とはずいぶんと懸け離れているようにみえる。絵のほぼ中央にいる女性は、小鯰を指差して、何か糾弾している様子だ。 彼女と小鯰との会話を聞くと、彼女は自分の夫と子を地震で亡くした震災遺族だった。

女は、「よくもわたしの亭主と子どもを殺してくれたな、わたしも殺してもらいに来た」と小鯰に憤懣をぶつける。家族を喪った震災後、ひとりで生きてゆけないということだ。

それを受けて小鯰は、「まことに申し訳ありません」とひたすら謝るよりほかない。そうした場面に、鹿島神の顔も曇っているようにみえる。骨折くらいの負傷ならば治るだろうが、身内を亡くした者に向かって、じきに治るよ、といったところで、それは虚妄にすぎない。世の再生を行ったはずの鹿島神も地震鯰も、被災遺族を前にしては、福を実現したとはいえない。つまり、地震後の世を生きるには、地震を災いとして体験した者、中でも被災死を遂げた者の遺族を忘れてはならない、と地震鯰絵は発信しているのである。

地震鯰絵をみるには、家族を亡くして地震を災禍としか受けとめられない遺族の声も聞かなくてはならない。この地震鯰絵の表現にみられるように、身内に死者が出たことを憤る遺族の存在をふまえてみれば、地震後に現出したり展望されたりしたという世の再生も、その地位が揺らいでしまうのだ。遺族にとってみれば、地震に世の再生といった福の側面などありようはずもなく、それはまったくの災いにほかならないのだ。



図3-14 錦絵版画「焼死大法会図」 (埼玉県立博物館所蔵)

しゃうしたいはうゑのず焼死大法会図

高名、変死、滅法世界、念仏種焼、拙主富者、南無阿弥陀仏、ミななミだ、南無阿弥陀仏、皆なミだ、 皆なミだ、皆なミだ、キンノヲト、ガアン、ガアン、ガアン 死者の法要 地震後に登場した摺物には、死んだ者たちも描かれている。鹿島神、要石、地震鯰という地震鯰絵の基本要素が描かれていないから地震鯰絵ではないが、「焼死大法会図」(図3-14)というこの摺物の中には、黒焦げのひと、瓦を手に持ち頭からは血を流すひと、梁に敷かれたひと、石を背負うひと、位牌を持つひとなどがいる。その者たちの足元をみれば、いずれも曖昧にぼかされてしまい、すなわち幽霊として表されているのであって、また、その彩色はというと、その多くは薄い青や灰色で彩られている死者たちなのだった。この1枚には、多くの死者と法要を営む坊主の姿しかみえない。記された文字をみると、南無阿弥陀仏の念仏と、「皆、涙、涙、涙」という繰り返しと、慰霊の鐘の音(「ガアン、ガアン、ガアン」)である。陰惨な絵柄に、繰り返される「涙」の文字と、絵の中に響く鎮魂の鐘の音に読経の声 これは悲しみ深く死者を悼む図像である。



図3-15 地震火災版画張交帖 地震鯰絵 無題 (東京大学総合図書館所蔵)

マアマア、そんなにしねヱでも、八つちがいふことがあるから、きいてくだせへ、これさこれさ しらミじやアあるめへし、よくつぶしだりやひたりしたな、まづちうにんから、ぶつちめろぶつちめろ るすをつけこミ、ふらちのはたらき、いごのミせしめ、かくごしろ

アイタ、、、、もふこんだから、うごきますめへから、アレサ、おちつひて、とつくり、八けをきいて下せへ、これさこれさ、アイタ、、、なまづたぶ、なまづたぶ、なまづたぶ

うらめしひ、なまつどの、ドロンドロン

ゆるぐとも よしひめなほす 要石 末広々と あふぐ御代とぞ

亡者の恨み 鹿島神、要石、地震鯰の登場する地震鯰絵にも、やはり死者が描かれた 1 枚がある(図3-15)。焼死したのであろう黒い骸骨は、大工の襟首をつかんでいる。 大工は、地震鯰を要石で押さえ込もうとする鹿島神を押しとどめている。

大工は震災景気で儲かったのだから地震を歓迎したわけで、地震を福とみる者と、地震が災いにほかならない者と、地震を押さえる者との3者のあいだに悶着が起きたというのだ。

骸骨と対になるように、地震鯰をはさんで対称の位置には、足がなく手を袖に隠した 亡霊もいる。ここで地震鯰をかばうのは、大工と左官と坊主だ(いずれも地震で儲かっ た者)。花魁は振り上げた煙管で(吉原の被災がふまえられている) 怒る商人は算盤で、 貸し本屋は本で、地震鯰を打ちたたこうという勢いをみせる。

黒い骸骨は、「虱」じゃあるまいし、よくも潰したり焼いたりしたな、まずは地震鯰をかばうものからとっちめる」と息巻く。「恨めしい鯰殿」とは亡霊の呪詛だ。恨みを抱いて成仏できない亡者が、地震鯰とその擁護者と敵対している絵柄である。

地震鯰をかばう者たちは、大工に代表されるように、地震が起きたことにより、その後に世の再生を福として享受できた者だった。彼らにとってみれば、地震が起きてよかった。だから、要石で地震鯰を押さえ込む鹿島神は邪魔となる。だが、死者の中でも特に遺恨を抱く亡者にとって、自分を災害死させた地震は災いにほかならず、だからこそ、地震を福とする者とは敵対するのである。もちろん、亡者の攻撃は、地震を起こした鯰に向けられるのだ。

地震鯰を前に高まる攻撃性、亡者の怨念、親鯰を前に泣きじゃくる子鯰の悲哀 この地震鯰絵は、地震とその後の事態の様相は様々な立場の複合であり、それゆえに悲惨な状況が現出したのだと表現している。





図3-16 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「大合戦図」(抄録) (東京大学総合図書館所蔵)

亡者と鯰の合戦 亡者と地震鯰との敵対関係が、戦争のように表される場合もある。「大合戦図(図3-16)という地震鯰絵の中には、3様に分けられた人びとが登場する。右手には鹿島神を後ろ盾に得た町人連中、左手には風神と雷神に煽られる地震鯰たち、そして、中央で両者の対抗をおもしろがって見物する職人連中。よくみると、この3者のほかに、もう一群の集団が薄く描かれている。それは、黒く彩色された絵の背景に潜むような亡者たちだ。恨みを抱いて死んだ者たちは、中央の職人連中よりはいくらか町人連中の方に位置して、その戦闘性を表している。死者の怨恨がここでは亡者の影という形をとって、攻撃性として表現されている。だからこの1枚は、「大合戦図」と題されたのだった。



総筆を震 鹿島太神宮 一生かけものに、いたします 楽 中苦苦 中楽 これも、かいてもらへ八、あとへのこるものだ 観音の塔 みあけるや 帰り花 これ八、おれが、もらつておこう、こんなしこと でも、うけとりてへ ありがてへ、ありがてへ、ありがてへ 徳堪忍後万歳楽

図3-17 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「鯰筆を震」 (東京大学総合図書館所蔵)



図3-18 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「登利詣」 (東京大学総合図書館所蔵)

憤怒の亡者たち 「鯰筆を震」と題された1枚にも、死者が登場する(図3-17)。 絵の中で鯰が筆を揮って掛け軸に書いた文字は、「徳堪忍後万歳楽」とみえる。それは、 徳を持って困苦を耐え忍んだ後に万歳楽の世となる、というくらいの意味だろうか。ま た「万歳楽」とは、地震除けの呪い言葉でもある。それを地震鯰が記すというのだから、 ここではもはや、地震鯰は災禍をもたらす悪ではないとなる。

その地震鯰の周囲には、「鹿島太神宮」と書かれた書を持って、「一生掛け物にいたします」という左官や、「楽」などと書かれた書を手にする大工や、屋根家などの職人たちと材木商がいる。これだけならば、好景気を喜ぶ職人層や商人と、鹿島神に押さえ込まれて「万歳楽」を「寿」で地震鯰により、福の享受が表現された地震鯰絵といえよう。

だが、そうした場となる座敷の障子には黒い影が投影されていて、室外から内をうかがう亡者の存在が暗示されている。ここには亡者たちの言葉は記されていない。だが、手に手に何か刀などでも持つかのような亡者たちが示す敵対性は明白だ。亡者たちは無言のうちにも、地震鯰は災いの元なのであって、鯰が起こした地震を祝福するかのような座敷の雰囲気を外から脅かしている。地震鯰が「徳」などと記したとはいっても、所詮はその場に集うものたちは金儲けの亡者なのだというかのようだ。

地震鯰絵の中で、もっとも緊張度の高い敵対性を表した1枚が「登利詣」(図3-18)である。酉(=登利)の市の熊手を振り上げて威嚇する地震鯰がみせる、開かれた口からのぞく歯は鋭い。地震鯰に対する画面左上の一群は、すべて影である。三味線や長煙管、棒や杖を振り上げるのはみな、地震鯰への遺恨を抱く亡者たちだ。彼ら彼女たちの怨恨の深さに見合うにように、地震鯰も激しく暴れようとする勢いをみせている。

ここには、多くの地震鯰絵が得意とする笑いはただの一片もなく、和解不能な敵対だけがある。

災いと福の両面性といっても、地震を災いとしか受けとめられない人びともいた。それはまさしく、被災死者の立場である。地震が起きて死んでしまったうえに、なお、この出来事を福と享受する者たちもいるとは、被災死者たちにとってみれば、けっして許すことのできない事態となる。だから亡者たちの攻撃性は激烈となる。その亡者たちに対する地震鯰は、その対面状況のもとで、福の様相など擲って、いっそうの荒ぶりをみせるのだ。



図 3 - 19 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「即席鯰はなし」 (東京大学総合図書館所蔵)

即席鯰はなり

これハ、此たびの地しんにつきまして、多くの蔵や立家をくづしましたるゆゑ、人々うれひかなしミゐたるに、やうやう月もたち日をおひけるに、あるひかのなまづ、ぼんにんのかたちをなしつゝ、町々をめぐりあるき、

ヲヤヲヤ、でへぶこゝの内ハくづれた、ヲヤ此くらもひどくふるつたア、こんなにぶちこわすつもりでハなかつた、

トひとりごとをいふをきょて、あたりよりかけいで、

これこれ、てめへハ、ぢしんしやアねへか、

ナニちしんだ、ウヌ、てめへのおかげで、かあいいつま子にわかれたり、

ソウヨ、おやをころしたかたきのぢしん、かくごしろ、

トてんてんに、ゑものゑものをもちきたり、さんざんに打擲いたレけれバ、ぢレんもいろいろわびけれども、いかなりやうけんなりがたく、ぢレん八すか所のきずをうけ、たをれけるを、おほぜいうちより見るに、からた中あざだらけなれバ、

コレコレ、このあざを見なせへ、

ヱヽ、こりやア、あざじやアねへ

ナゼヘ

イヤサ、これ八なまづたものを

敵対から笑いへ 極限に達しようとする怨みも、時間の経過とともに薄らいでいく。「即席鯰はなし」(図3-19)という地震鯰絵には、地震発生から数日後に、「こんなにぶち壊すつもりではなかった」と独り言をいいながら町々を歩きまわる地震鯰が登場する。それを聞きつけた被災者や遺族は地震鯰に、「親の仇だ覚悟しろ」などと詰め寄る。棒を持った者たちによりさんざんに打ちのめされた地震鯰は、数箇所の傷を受けて倒れてしまった。みればからだじゅう痣だらけだ。

こうした笑いの中で、地震鯰と被災者や遺族との間の対抗が解消されようとしている。この1枚に描かれた鯰の髭は長く伸びて弛んで、地震を起こす力も弛緩してしまったようだ。また、鯰の着物の柄をみると、たくさんの瓢箪模様であり、地震鯰を充分に押さえ込んでいるとの表現になっている。ひとつの瓢箪ではつるつるすべって、しっかりと鯰を押さえ込めないが、これだけの数があればすべることはなく充分というわけだ。災いや悪としての地震鯰の破壊力と、遺族の怨恨から噴出する攻撃性との間の対抗は、時間の経過と笑いとによりここに霧消しつつあるのだった。



図3-20 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「じしん百万遍」 (東京大学総合図書館所蔵)

じしん百万遍

一 此たび、わたくしハ、千年からくにぐにをなやめ、鹿嶋様へたびたびわび入、こんど又、大江戸をらんぼふニいすぶり、家蔵をたほし、人をおふくつぶし、もふこんどわ申わけなく、出家いたし、諸国かい国に出るところい、又此せつ、金もふけの人が、けさ衣をもつて、一どふのたのミにハ、なにもをどけのためだから、百万べんをしてくだされ、とゆふからいたします、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、なますた、なますた、なますた、なますた

百万回の南無阿弥陀仏 ついで、「じしん百万遍」(図3-20)という1枚をみよう。ここでは坊主に扮した地震鯰が中央に座して、それを車座になって囲む鳶や左官などの職人連が数珠を回している。輪になって数珠を回しながら南無阿弥陀仏と唱える、災いを祓う行為としての百万遍である。

地震鯰は江戸を乱暴に揺すぶってしまったことを申し訳なく思い、そのお詫びにと出家して諸国巡礼に出たと陳謝する。百万遍に集まった職人連中は、すでに地震鯰絵ではお馴染みのように、地震後の好況により潤った人びとである。

儲けを得た人びとも、地震を起こした鯰とともに死者の慰霊に努めるならば、それは 徳のある行為となって、儲けという欲が中和されるだろう。もはや亡者がこの世の平穏 を揺るがすこともない。こうして皆で唱える南無阿弥陀仏の名号は、この絵の中の文字 表記では、「なますた」(鯰だ)へと変化してゆき、ここでも言葉遊びのくすぐりが仕掛 けられている。

刀に手を掛ける武士がいるならば、死者の遺恨はすべて解消されたわけではなく、いまだ亡者が彷徨っている事態ではある。しかし、それでも亡者たちは、薄墨で描かれたようにこの絵のなかで仄かに揺らめいて、もうじき昇天するかのようだ。南無阿弥陀仏がナンマイダとなり、それが、鯰だ、へと変わってゆく言葉遊びに笑いが引き出されながら、この地震鯰絵は亡者たちの鎮魂を果たそうとしている。



図 3 - 21 地震鯰絵 「切腹鯰(仮)」 (東京大学地震研究所所蔵)

長者 アイや、このおやぢめも、としよりたでらに、おのおのがたの、はなぼうになつて、むねんのうつふん、はらさんと、ごゝろやたけにはりつめて、ゆミほどたのミし、このくしを、ひきのばしつゝ、きて見れバ、じばらをきつて、かくまでに、わびるこゝろのしゆしようさに、にくしとおもふ、こゝろ八うせ、けつてふびんに、ぞんじます、かやう申さバとしよりの、こゝろよ八しこと、おぼしめさふが、ようかんがへて、ごらうじませ、きやつめが、いのちを、とれバどて、このそんもう八、うまらぬせんさく、よのたとへにも、かたきといふ、金にあふた八、もつけのさいはひ、となたも、ちからのおよぶたけ、サアサア、かたきを、おとりなさい、これで、ほんまうト、とげましたト、金ばこかゝへかかへ、たちあがれバ、げにもと、ミなミな、とくしんせし八、げに、世なほし、世なほし

<u>亡者</u> ア、、わたしらも、このうらミを、はらそふと、おもひつめて、十まんおくどを、はるばると、きたもの」、このていたらくといひ、あのごゐんきよの、おつしやるところも、ぢごく、ごもつともだ、これで、うらミハ、はれました、はれました

腹を切る鯰 そして、「切腹鯰(仮)」の地震鯰絵(図3-21)へと目を転じると、そこでは、地震鯰が切腹をしている場面がみられる。裂かれた地震鯰の腹からは小判があふれ出ている。この地震鯰は千両箱を手にしている。なるほど、自腹を切る、ということなのだろう。

その右上には、やはり千両箱を抱えた一群の人びとが、左上には薄墨のように彩色された一群がいる。そして右手上空には、弓矢を携えた、光背のある神がいる。地震鯰に突き刺さった矢は、その神の弓から放たれたのだろう。

記された文字をみると、ここには「長者」と「亡者」の声しか記されていない。右上の千両箱を持つ人びとが長者で、左上の薄く彩られた者たちが亡者となる。長者は、無念の鬱憤を晴らそうとしてここまで来てみれば、地震鯰が自腹を切って詫びるその殊勝さが感じられたので、もう憎悪の念は消えてしまい、かえって不憫に思う、という。「どなたも仇を取りなさい」と勧める声にも、「もう遂げた、得心した、もはや世直しだ」との声が返ってくる。

さて、亡者たちはというと、その者たちもやはり「恨みを晴らすつもりで、十万億土をはるばるやって来た、だが地震鯰の切腹という事態に遭遇してみると、長者のいうことも道理だ、もう怨みは晴れた」という。

長者などの持てる者にとってみれば、地震は自分たちが貯め込んだ富を放出しなくてはならないきっかけとなったがゆえに地震を恨むわけだし、被災死した者たちにとっても、自分たちの命を奪った地震を怨むからこそ亡者となったのだった。だが、この両者が恨みは晴れたといい、もう世の再生を得心できるとなったのは、怨恨の対象となった災いや悪としての地震鯰の自死によってだった。

死してなお富を放出しようとする地震鯰は、まるで絶対の善か福を体現するかのように振舞っているといえよう。ひたすら富をもたらすだけの地震鯰ならば、そして長者からも亡者かも恨まれることなく施しを行う地震鯰ならば、すべての者から歓迎される福をもたらすものとして表されていることとなる。

まとめ 地震とはそもそも、何かしらの被害をもたらす出来事である。普段の日々の 生活もままならず、さまざまな難儀を抱える人びとにとってのかすかな希望として、地 震後の施行や好況があったがゆえに、それが世の再生ととらえられたのだった。

もちろん「世直し」にせよ「世直り」にせよ、それは人びとの日常を超えた領分の事象となる。地震とその後の事態をふまえて、人びとが回帰すべき日常を見通すには、いったい富とは社会の中にどのようなものとしてあるのか、多数の人びとが一挙に経験した災害をめぐって被災とは何かを充分に考えなくてはならない、という指示が地震鯰絵というメディアから発信されたのだった。

被災死者の遺族や、何より震災により死んだ者にとってみれば、地震は災いや悪にほかならない。死者の数がいったいどのくらいなのか、その確実な数値はともかくも、この地震により人びとが死亡したことにまちがいはない。すると、ただひたすら福としての世の再生を謳歌する人びとがいるのならば、その手放しの祝福を死者が脅かすこととなる。いいかえれば、世の再生を享受するには、そのきっかけとなった地震によって被災死した者たちの鎮魂と慰霊を果たさなくてはならないと、地震鯰絵は告げているのである。

地震鯰が切腹する絵をみれば、そこには地震鯰が放出する富を享受する者は描かれていない。長者の怨恨も亡者の怨念も晴れたところで、地震により放出された富は、特定の誰か(たとえば職人層など)に行き渡ったというのではなく、広く社会に共有されている、だからこそ、長者や亡者もそうした世のありようを納得したとでもいうかのようである。

第4節 世相と「国土」への想像

この安政 2 年 (1855) 10 月 2 日の地震は、おおよそ、江戸直下を震源域とするマグニチュード 7.0~7.1 の規模と考えられている。この安政江戸地震は、江戸の歴史、ひいては日本の歴史をたどるときに欠くことのできない大きな出来事として記録されてきた。もちろん、ほとんどの日本史年表に取りあげられた事項である。

江戸の、そして日本の歴史上の出来事としては、この地震の前年とさらにもう1年前の2度にわたり、ペリーを司令官とするアメリカ東インド艦隊のいわゆる黒船が江戸湾内に侵航してきたことも、私たちは知っている。このペリー来航という出来事もまた、地震鯰絵にも描かれたのだった。



図 3 - 22 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「安政二年十月二日夜大地震鯰問答」 (東京大学総合図書館所蔵)

安政二年十月二日夜大地震鯰問答

なまづ

ヤア、あめりかのへげたれめ、此日本をばかにして、二三ねんあとから、おしをつよくもきやアがる、うぬらがくるので、江戸のまちがそうぞうしい、やくにもたゝねへ、かうゑきなんぞ、とりかへべい八よしてくれ、江戸中あるく、あめうりでたくさんだ、用八ねへから、はやくしりにほをかけて、かぢをなをして、さつさと立され立され

アメリカ

なにをこしやくな、なまづぼうず、てまへたちのしるところでねへ、おらが国八おじひな国で、しよく人でも、かりうどでも、なんでもじひをするもの八、けふまで存山をはたらひても、あす八見だされ、王となる、それゆへ、諸々の国々からしたつてくるので、がつしゆこくといふ国だア、ところが、こまつた事二八、人がふへても、くふものがねへから、日本へ、米や、大こん、に八とりをもらひに来ても、くれやふがすけねへ、それゆへ、たびたびうるさくやつてくる八へ

なまづ

だまれペロリ、なんぼうぬが口がしこく、じひの国だといつたとて、くらいものがなけれバ、びんぼうこくにちがひねへ、あめりかに、神 や仏があるならバ、五こくもたくさんできそふなもの、ねへとぬかすうへからハ、まいにちまいにちのくひものを、海ぞくなして、とつた にちが八ぬ、これをおもへバ、わが国の神 々さまがあつまつて、しなどの風をふきおこし、うぬらがふねをはじめ、おろしやを、うミへし づめしも、たしか去年の十一月、神八ひれいをうけたま八ず、た八ことつくな、きくミ、ハ、もたねへ、もたねへ

アメリカ

おかしくも、道をこしらへていふなまづ、おのれ、平日人間二、ひやうたんでおさへられながら、去ねん霜月四日のひ、下田ぬまづをうごかして、われわれを、おひかへさんとす、されどもうごかぬ、あめりかだましゐ

なまづ

ヱ、、やかまい、毛とうじん、たちさらずバ、どろのなかへ、うづめてくれんアメリカ うづめるなら、うづめて見よ、おれも、けんづきでつぼうだぞ

左官

ア、、両方ともに、しづまれ、しづまれ、とふからんものハ、ひゞきのおと二も、おきゝなせへ、ちかくハよつて、めにもミますの古蔵のやぶれ、すミからすミまで、あらうちを、たのむたのむとたのまれて、おちたるかべものしつける、小手のきいたる江戸ツ子と、ミなさん方のおほめにあづかるも、こんどのじしんのさハぎから、これをおもへバありがてへ、まづまづまづ、御両所とも、いざこざなしに、くびつひき、ア、見たくでもねへ、およしなせへ

ペリーと鯰が問答する 「安政二年十月二日夜大地震鯰問答」(図3-22)は、さきにもみたような首引きの構図をとる地震鯰絵である。ここで首引きを競うというのは、絵の表題にもあるように、問答することの喩えとなっている。それを行うのが、地震鯰とペリー(画中の文字では「アメリカ」あるいは「ペロリ」と記されている)である。地震鯰は反り返り、ペリーは前のめりとなり、行司役の左官が軍配よろしく仕事道具のこて板を鯰にあげたのだから、この首引き = 問答は、地震鯰の勝ちというわけだ。

両者の問答を聞くと、地震鯰は「日本を馬鹿」にするペリーに向かって、「交易をやめて早く立ち去れ」と罵倒する。対するペリーは、自分たちを「慈悲の国」から来たのだと紹介する。「我が国では慈悲のあるものは見出されて王になることができる、だからあちこちからその国柄を慕って人びとが集まってくるから「合衆国」というのだ」と国名の表記の通りにその由来をペリーは陳述した。「慈悲の国ゆえにひとが多く集まり過ぎて物資が不足したので、日本へ米や大根や鶏を貰いに来ているのだ」と、この来航についてもペリーは解説する。

ここで少し地震鯰絵を離れてみると、この安政江戸地震の1年前のこととなる安政東海、安政南海地震のときにも、地震と異国船来航とが関連づけられた風間が記録されている。すなわち、異国船のみならず日本に懇願に来たアメリカを始めとする国々も津波によって絶滅した、その後は米や大根が豊穣となった、日本は神国なので神風だけでなく地震津波を起こすことができる、天下泰平の楽土が実現する、というのである。人びとの生活を揺るがす大きな出来事としての地震が繰り返されることと、当時の異国船来航という出来事もそれに重ね合わされて、この安政江戸地震のときに、地震鯰絵の中にそうした時代の世相が描き込まれたのである。

さて、地震鯰は同時代の世相としての異国船渡来にどう向き合うのだろうか。地震鯰は、「黙れペロリ」といい放ち、その来航は略奪が狙いではないかと迫ったうえで、前年の 11 月に津波でロシア船が難破した事実を取りあげて、それは我国の神々が吹かせた「科声の風」(穢れを祓ういわば神風)によるものだ、「神は非礼を受け入れないぞ」とペリーを恫喝する。ここで地震鯰の着物をみれば、そこには打出の小槌や貨幣が描かれている。すなわち、福をもたらす善の地震鯰が、異国の脅威としてのペリーを駆逐するという表現がこの地震鯰絵なのだった。物資の略奪を図る異国船は、日本人にとっては災いとなる。福としての地震は、そうした国外からの災禍をも祓うというのである。



大鯰江戸の賑ひ

大国の つちうこかして 市中へ 宝の山を つむそめで たき

くじらだ、くじらだ、此まへ品川へきたより、よつぼとゑらい、ゑらい、ゑらい

ヤア、つなミかとおもつたら、ゑらいなまづだ、ヨウくるくる、 まつびらだ、しかしゆりかへしより八、よからう

うまく一ばんついてくれ

はやくこいこい、見せものに出すつもりだ、こゝへつけつけ、きてくれる

人にミせるに八、なりたけ大きいのがいゝが、此あいたのと き八、大きすぎた

図3-23 地震鯰絵「大鯰江戸の賑ひ」 (埼玉県立博物館所蔵)



〔前略〕

大黒の つち動かして 市中に 宝の山を 積ぞめでた き 紀の長丸

〔後略〕

図3-24 地震火災版画張交帖 地震鯰絵 無題 (東京大学総合図書館所蔵)

「大黒」から「大国」へ 「大総江戸の賑ひ」(図3-23)と題された地震鯰絵は、画面の右から左へと動こうとする巨大な生物をみせている。その髭からすれば画面に登場した生物は巨大な鯰となるし、その背から吹きあげた潮はそれが鯨であると示している。

地の文も、「鯨は7里を潤し、鯰は4里四方を動かす」というように、この巨大生物は鯨でもあり、鯰でもあると記している。回遊性の鯨はしばしば福をもたらす来訪神とみなされ、また江戸湾では実際に鯨が目撃されたこともあったのだから、この鯨も福や富をもたらして人びとを潤わす福となる。しかも鯨によるその潤いは7里四方、鯰が起こす地震は4里四方というのだから、その勢力を照らし合わせてみれば、地震という凶変よりも世の再生という福が出現しつつあるというわけで、確かに浜で見物する男女5人も手招きをして、いままさに現れつつある眼前の事態を歓迎しているのである。

鯨が吹きあげる潮には大量の貨幣が含まれている。そして、「大国の つち動かして市中へ 宝の山を 積むぞ目出度き」との祝福歌も合わせて記されている(ただし、逆様に書かれている)。

この1首は別な地震鯰絵(図3-24)では、「大黒の つち……」と表記されている。 大黒が地震鯰を踏みつけて小槌を振りあげると貨幣がまかれるという図像だ。富の豊か さを表すには、「大黒の槌」とした表記の方がわかりやすい。

「大鯰江戸の賑」の地震鯰絵に戻ると、地震とは富の均衡や諸方融通を実現する世の再生だというのならば、宝の山が築かれる市中とは大揺れしたばかりの江戸となり、そのために動いた「大国の土」とはすなわち日本の国土となる。現に、この「大国の つち動かして……」という歌を読めるように地震鯰絵の天地をひっくり返してみると、潮が鯨から空に吹きあげられたのではなく、大地に宝の山が築かれたようにみえる。

世の再生とは、非日常にほかならず、それは日々の生活世界が転倒した事態である。だからこの地震鯰絵でも、絵自体をひっくり返さないと記された祝福歌が読めないように仕掛けられていた。この地震が起きた時期には、もうひとつペリー来航という非日常の事態を人びとは体験していた。異国の夷狄と対峙することにより、人びとは一国のもとにあるという一体性を意識しつつあった。地震という非日常の事態はまた、異国船渡来という日常を超えた前代未聞の出来事と重ね合わせて理解されようとしていた。このとき、大地の揺れにせよ国政を揺るがす大事件にせよ、そうした体験が「大国の土」を想像させたのだろう。



図 3 - 25 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「八百万神御守護末代地震降伏之図」 (東京大学総合図書館所蔵)

八百万神御守護末代地震降伏之図

安政二年十月二日夜の四時、神々出雲へ大一座のるすを附込、例の大総ね入ばなゆへねがへりをする所、江戸十里四方あのめきあのめきピシヤリゆへ、自身もしよげになって塞てゐる所へ、江戸中の鎮守立合二て吟味ある

地震共でたらめに 近頃ハとつの奴等、度々此国へ参り、地の下でもうるさく存じ、日本の後を力 任 せに動 潰したる、尻尾はづミに乗て、江戸表へ持出し候段、幾重にもお免、お免と、地の下で手を合せたるハ、九太夫といふ身振なり

山王 神田 二ヶ所の氏子、怪我少きゆへ、今度ハ仲人二成給ひ、此以後急度動き申間鋪の一札を、月番深川の蛭子の営へとられ、鯰共ふるへながら判をおす、日々少しづい動きたるハ、大方此時なるべし 印 この判八彼奴が証文の印形なれバ、これを懐中する者八地震の難を免

生け捕られた鯰たち さて、地震鯰絵のなかでは、しばしば地震鯰は擬人化され、その名が与えて表されている。「八百万神御守護末代地震降伏之図」(図3-25)には、この地震鯰絵がつくられたときの「江戸地震」、そして過去に遡って嘉永6年(1853)の「小田原地震」、弘化4年(1847)の「信州地震(善光寺地震)」、文政11年(1828)の「越後地震」が、瓢箪柄の紋付を着てうずくまる姿で描かれている。現代の地震学は、この4つの地震が当時30年くらいの間で起きたマグニチュード6を超える大地震であると教えている。今回の地震を起こした江戸地震鯰は、深川恵比寿に促されて証文に判を押させられている。

この絵の地の文では、地震鯰の弁明という形をとって地震という現象についての解説がされている。地震鯰は、「近ごろ外国の奴等がたびたびこの国にやって来ることをうるさく思っていた、そこで日本の後ろを力まかせに揺り動かし、その弾みで江戸表に出してしまったのが、地震という揺れとなった」と言っている。

対する鹿島神を筆頭とする神々は、「要石で押さえるくらいでは甘口なので、もっと厳しい処罰として蒲焼」にしてしまうぞ、と地震鯰を脅す。そこに、氏子に怪我が少なかったという山王権現と神田明神が仲介を買って出て、くわえて深川恵比寿が出て来て、「今後は2度と動きません」という一札を地震鯰から取った。

この地震鯰絵には、地震鯰が押したという印形があり、この印を懐中するものは地震の難をのがれることができるという。つまり、震災除けの呪力が籠もっているというわけだ。地震鯰絵は、実際にお守りとして用いられたこともあった。

こうした日本の国土を想像させる場面を描いた地震鯰絵に、表題では日本を守護する 八百万神の名が記されているが、この地震鯰絵の中に実際に描かれたのは八百万神では なく(もちろん八百万神のすべてを描くことは不可能だ)、鹿島神を始めとして、神田 明神、山王権現、深川八幡などいずれも江戸の神々である。つまり、この地震鯰絵の中 では、この地震という出来事を、江戸のそれとするのか日本の出来事とするのかをめぐ って、せめぎ合いが生じているのである。



図 3 - 26 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「恵比寿天申訳之記」 (東京大学総合図書館所蔵)

ゑびすてんもふしわけのき 恵比寿天申訳之記

我等諸神に、留守居をあづかり罷居候ところ、あまりよき、たいをつりしゆへ、一畳をすごし、たいすい二および候あいだをつけこミ、たちまち、かなめいしをはねかへし、大江戸へまかりいで、蔵のこしまきを、うちくづし、はちまきをはづし、諸家をつぶし、死亡人すくなからず、出火いたさせ、はなはだ、ぼうじやくふじんのしよぎやう、いたし候ゆへ、さつそくとりおさへ、ぎんミ仕候ところ、一とうのなまづ八、身ぶるひして、大二おそれ、一言のこたへもなく、このとき、かしらだちたるとミゆるもの、つゝしんで申たまふ

おそれながら、仰のおもむき、かしてまり候也、此たび大へんのことハ、一とふり、御きゝ遊され下さるべし、此義ハ、申上ずとも、御存の義にして、はるなつあきふゆのうちに、あついじふんに、さむい日あり、さむいときに、あたゝかなる日あり、かくのごとく、きこうのくるひ有て、かんだんの順なるとしハ、少く候、今年最ふじゆんなから、ごゝくのよくミのり候ハ、八百万神の御守り遊され候御力による所也、さて、天地に、かんだんの順の、さだまりありて、はるなつと、其きのじかう、ことの外、くるひ候ゆへ、わたくしとも、くにのすまひにてハ、以の外、おもしろきじせつになりたりと、わきまへなきものども、ちんしんのごとく、くるひまハり候ゆへ、わたくしども、いろいろ、せいとうをいたせども、みゝにもかけず、らんぼうにくるひさ八ぎ候より、つひに、思ひよらざる、日本へひびき、御しはいの内なるところを、そんじ候だん、いかなるつミに、おこなわるとも、いはいこれなく候也、され共、わけて御ねがひにハ、わたくしどものこりなく、御かりつくし候とも、そんじたる、いへくらの、たつにもあらねパ、まつしばらくの、いのちを御あづけ下され、これより、日本のとちをまもり、いかなる、じかうちがひにても、このたびのごときことハ、もうとう仕らず、天下たいへい、ごこくほうねんを、君が代をまもり奉り候べしと、一とうに願がひけるゆへ、わたくしより、御わび申上候ところ、さつそく御きゝすミ下され、まことにもつて、ありがたく候、きやうこう十月のため、よつて苦難のことし

じしんよけのまもり 自身除之守

東方 [梵字] 西方 [梵字] 南方 [梵字] 北方 [梵字]、各四方へはるべし、[梵字] 家の中なる、てん上にはる、又守に入置でもよし

「日本」を護る神 恵比寿を介して地震鯰が鹿島神に詫びるという場面は、ほかの地震鯰絵にもみえる。「恵比寿天申訳之記」(図3-26)では、「天候不順だったので乱暴に騒いでしまい、思いも掛けずに日本へ響き、損害を与えてしまった」と地震鯰は詫びたうえで、「もし命乞いが叶うのならば、これからは日本の土地を護り、そして天下泰平、五穀豊年、君が代を護る」と誓う。

まとめ ここにいう「君」が誰なのかはともかくも、地震鯰絵を構成する基本要素である、地震鯰 鹿島神 要石にくわえて、七福神の恵比寿や、江戸の鎮守や氏神たちが地震鯰絵の中に登場しているのである。また、現実に使われたであろうお守りとしての梵字も登場したのならば、鹿島神に代わって、地震鯰を押さえたり世の再生を実現したりする、新しい神仏への信仰が現れようとしているといえる。

現実に地震が起きたことは否定できないとなれば、その事実にあわせて、人びとの信仰心が変化しだしたのである。

第5節 救済と再生をめぐる神々の顕現

鹿島神 地震鯰 要石という組み合わせが地震鯰絵という図像となって世に現れたのは、ほとんどこの地震のときが初めてとなった。地震の発生と震災への防御をめぐる民俗や伝承が、初めて地震鯰絵として形づくられるきっかけとなったこの安政江戸地震は、地震による災いを祓う神々をめぐる信仰をも揺さぶることとなった。人びとの生活が危機に瀕する震災に対処しようとするとき、どのような信仰が現れたのかを地震鯰絵にみるとしよう。

すでにみた八百万神が現れるという地震鯰絵(図3-25参照)があるように、そこに 鹿島神が描かれていたとしても、地震鯰を押さえるには鹿島神では不充分という事態が 地震鯰絵の中に表れているのである。それは何故だろうか。

理由は地震が起きた日付とかかわっている。10月は神無月、つまり鹿島神も出雲へ行っていたがために、その留守をいいことに地震鯰が寝返りをうったことが地震になってしまった、と地震鯰絵の中では説明されている。神々が留守の神無月とはいえ、江戸で地震が起きてしまい、ようやく鹿島神と江戸の諸神が戻った江戸で、深川恵比寿が地震鯰に詫びを迫って、神々はそれを受け入れたという事態の収拾が、この地震鯰絵には表されている。恵比寿は留守神としても知られているから、その役割を見事に果たしたとなる。



図 3 - 27 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「差出し申御詫一札之事」 (東京大学総合図書館所蔵)

差出し申御詫一札之事

一 我等義、当十月二日夜、河二乗じ鳴動之上、前後亡失仕、八百万御神たち御留守をも花弁、御江戸町々家蔵等、破逆致し、損亡 敷敷 候二付、神仏方御怒之段、御尤二御座候、然ル所、先夜、南天之節、津浪共打寄候二付、我等電出、八大龍王へ相頼、右津なミ差炭させ、御ぶなん二相過候、依之蛭子神を以て、御詫申入候所、ゆるゆる御聞済被下置、千万難有奉存候、向後震候節八、鯰一同、蒲焼、すつぽん煮等に、被成候共、決而一毛之動、申間敷候、為後日、さしゆれ申一発、仍不断の如し安政二年霜月二日 地震坊 大鯰

6

火事なら、わたしもとくしんつくたが、だしぬけに、くづすとハ、あんまり、むごひしかたじやア、あるめへか

火じ

ヲヽ、そうよ、わしも、やくきハねへけれど、よんどころなく、つぶされのうへで、でき心、りやうげんしなせへ 五重のとう

おめへかた八、ともかくも、おれ八なんにも、じやまに八ならす、ぢしんにあたまを、はりたをされる、ヱヽ、つかねへやアかミなり

コウ、ぢしん、てめへやおれ八ょの中で、仲間トいふ八しつてゐるに、なせおとしてくれた、ヱヽ、おちていひしふんに八、 おれかかつてに、一人りておちる、かぜのかミのまへもある八へ、よごれたのを、ぬり直してくれろ

ゑびす

わしも十月そうそうから、こんなさ八ぎ、かミがミへも、いひわけなく、やうやうおわび八、申たなれど、このご八きつと、ふるふなヨ

かしまさま

かなめいしが、ひやうたんのやうになつて八、わしが、いせへすまぬぞ、きつと、つつしめなまづ

ヘイヘイヘイヘイヘイへイ、モウ、ぬらくらハ、いたしませぬ

鯰の詫び証文 「差出し申御詫一札之事」(図3-27)で展開する地震鯰の陳述では、 大地の鳴動は「八百万御神たちの御留守をもわきまえず」に酔ったうえでの出来事だっ たという。江戸の家々が破壊されて「神仏が御怒り」になったので、恵比寿をとおして 詫びてみれば何とか聞き入れられた、とここでも恵比寿が地震鯰と神々の間の仲介者と なっている。ここでは、鹿島神(ただしその胸には日輪のような赤い丸がある)恵比寿、 ひとの姿をした雷と火事そして親父の前で、地震鯰は謝罪している。

その地震鯰に向かって、恵比寿は「わしも 10 月早々からこんな騒ぎでは、神々に言い訳もできない、ようやくお詫びが聞き入れられたので、今後は絶対に震うな」と諭し、鹿島神は「要石が瓢箪のようになってすべってしまい地震鯰を押さえられないのでは、わしが伊勢にすまない、これからは慎め」と叱る。留守神としての恵比寿は、留守中の震災について神々に対して責を負い、不在中に起きた災いをめぐって鹿島神は伊勢すなわち天照大神に対して自らの責を負うというように、ここには神々の序列が示されているのである。



図3-28 地震鯰絵「地震のまもり」 (埼玉県立博物館所蔵)

地震のまもり

天照太神を初メとして、鹿島太明神、又八、地の神、井戸神にて、地しんをいましめたもふの図をしるし、地震除の守りまで、書のせ置候、何卒、高評を願ふのミ

天照太神曰

其外共義、 ត や より 間 せおく通り、 此 娑婆世界のうち、日本国中の地の上八、それがしを 初 メとして、 諸神の守護にして、地の下八金輪ならく、ゑんま王の住所まで、堅牢地神と、鹿島明神のあづかる所、しかるに、例年のことにして、朔日より出雲の大社へ参りいる、留守中を見こミ、其方ども、平常の戒をわすれ、乱行いたし、御府内近国に至迄、ゆり潰し、家くら、石垣其外を崩し、其上出火となり、数ケ所の焼失のミならず、けが人尚又いち命に及もの、甚多きよし、是皆其方ども、かねてのいましめを、やぶりたる大ざい也

鹿島太神曰

いかに其方とも、今天照宮様の仰の通り集る、そのうちとても、かくの事き、異変ありて八、それがしの、守護役のかど、立がたく、 それがし 、ないがしろにする、ふらちもの、壱ぴきも其まゝ、さし置がたし、へんとう有やと、ふかくいかりをあら八し、「仰けるに、

一同のなまづハ、身ぶるひして、大におそれ、一言の申ひらきなき、このとき、西の方のなまづ慎んで申ス、

おそれながら、仰のおもむき、かしこまり候、此度大へんのことハ、一ト通、御聞遊され下さるべし、此義ハ、申上ずとも、御存の義にて、はるなつあきふゆのうちに、あつき時分に、寒き日あり、寒きときに、暑き日あり、かくのごとく、気候のくるひ有て、かん

それ、地しんハ、二十里四方も、ゆるものにて、そのいへばかり、のがるゝといふ事なし、されど、鹿嶋明神の御宮居をはじめ、其御領分内にすむ、家あまたあれど、むかしより、地しんにて、わざわハあることをきかず、今左にしるす

東方[梵字] 西方[梵字] 南方[梵字] 北方[梵字] はる也

〔梵字〕 家の中なる、てん上へはる、又守りにて、首にかける也

右の守八、たとへ、ぢしん有ても、此家ばかり八、さ八りなし、万化宝といふ本を、見るべし、此ことを信じて、用ひたる家八、何ごともなし、されば是も、世の心得にならんと、こゝにしるすなり

語り始める天照大神 そして、天照大神自身が語り出す地震鯰絵もある。「地震のまもり」(図3-28)に描かれた地震鯰には、東西南北の四方の名が与えられて、すなわち世界の全体を構成する地震鯰が引き出されている。江戸地震鯰といった地域性を超えた地震鯰の登場とは、世界全体の危機が暗示されている。こうした地震鯰の表現に見合うように、ここに現れた神々は、地と水という世界を構成する二元素の神に、鹿島神、天照大神の4神となった。

「この娑婆世界のうち大日本国中の地上は、それがしを始めとして諸神が守護」する場所なのだ、とさきの鹿島神の託宣を、ここでは天照大神が告げている。地震鯰に対峙する最前線に天照大神が顕現したのである。天照大神を前にし、鹿島神からも叱責される地震鯰は、ここでも、日本の国土を守護して天下泰平を実現すると誓う。



図3-29 地震鯰絵(埼玉県立博物館所蔵)

八幡宮

我等も、遠方注進へ行ニ付、今帰り、これ八大へん大へん

太神宮

江戸にて、なまづどもうちよりさ八き候よし、鹿嶋明神通りかけ、ちうしんいたすゆへ、そふそふ欠付、諸人をたすけの手当なきまゝ、乗馬の毛を一本ツ、あたへ候、しづかに立のけ立のけ

鹿嶋大明神

是八大へん大へん、外の国とちかひ、当所二てなまづともかやうのそふどふいたす事、我等留主中をあなどり候だん、不届至極、一人もそのままに致かたり、諸人もはや我帰る上八、あんど致、けかせぬやう、しづまれりづまれ

天を飛翔する神々 天照大神と鹿島神と八幡宮の3神が江戸上空を飛行する地震鯰 絵もある(図3-29)。下界の市中には、家屋の倒壊や延焼がみられ、人びとが逃げ惑う様相がみえる。この被災状況のうえで、3神の中央に天照大神が現れて、自らが乗る白馬の毛を振りまいている。下界で座り込む被災者は鹿島神に背を向けて、天照大神が降らす白毛の方に両手を合わせて信心をみせている。ただし、その白毛が何を意味するのかは、この地震鯰絵には記されていない。

もうひとりこの地震鯰絵には、倒壊した家屋から大きな包みを持ち出した被災者が描かれている。その包みには「福」と書かれているようにみえる。まるで江戸上空に3神が到来すれば、ようやく福が実現するというような期待を暗示している。



図 3 - 30 地震鯰絵「大日本国帝祖大御神霊険万民を助給ふ之図」 (東京大学史料編纂所所蔵)

大日本国帝祖大御神霊険万民を助給ふ之図

時二安政卯十月二日ノ夜四ツ時、関東みそうの大地震、万官いためんとす、賀時に神助有テ、古馬の毛をあたへ給ふと云共、その時、是を知る人なし、二十日又八三十日をすぎ、何人の云出しけん、其夜、身付たる衣をさぐるに、たもとの内に、布首をぬひて、あるひ八二本又八三筋、白毛有る、一才の小児にいたる迄、首前たり、其ありかたさ、肝にめいす、是にヨリテ、諸国の人民、我 神国たる事を 尊 べシ、帝、 王、諸侯、此君国の民に、心をもちい給ふ事、大御神にか八る事なし、御恵明暮八するゝ事無人八、さいなん事まぬがるなり、能前にしるべし

日本橋より北之方八千住宿大半崩れ小塚瓦丁両側不残焼る〔中略〕

右は、実正二、見分いたし記す、作りものに八、あらざるなり

御救小屋 幸橋御門外 浅草広小路 深川 辺新田 深川八幡境内 上野御山丁 下谷広小路

万民を救う天照大神 天照大神が描かれたもう 1 枚は、「大日本国帝祖大御神霊険万民を助給ふ之図」(図3-30)と題されている。ここにも江戸の町並みが描かれ、細かな文字で各町の被災状況や被災を免れた状況が列挙されている。「お救い小屋」の場所まで書き記したこの情報は、「実正に見分して記した、つくりものではない」との解説がつけられている。

江戸上空に顕現した神々は6神。神田明神、氷川明神、山王権現、八幡菩薩といった 江戸の神々にくわえて、それらと同列に鹿島神、そして、それらの一段うえに大きく、 橙色に輝く陽光を放つ日輪を背景にした神が天照大神である。

天照大神は白馬にまたがる姿で描かれ、しかも、地の文では、天照大神が降らす白毛の意味も記されている。関東に未曾有の大地震が起こってしまい万民が苦しんでいるところに神の助けがあった。その証しが天照大神の乗る白馬の白毛なのだという。地震当夜はすぐにこの天照大神の助けを理解した者はいなかったが、しばらくすると、誰がいい出したのか、着衣の一袂にこの白毛があったとささやかれるようになった、というのである。

天照大神以外の諸神は、背負った袋からその白毛を取り出して、江戸の町々に振りまいている。この地震鯰絵では、文字で各町の被災状況が記されているのだが、天照大神を筆頭とする諸神が江戸の上空に顕現して、神助の証しとしての白毛を振りまいているのだから、もう震災からの回復は整ったのだというように、描かれた町並みに被害の様相はまったくみられない。

ここに現れた天照大神は、震災という事態からの救済を果たす最高神にして、太陽神であり、また、天皇の祖先神だとみせられたのである。



図3-31 地震鯰絵「世直し鯰の情け」 (埼玉県立博物館所蔵)

よなをなまづなさけせずし鯰の情

十月二日、大地しんの時、いせの御神馬が駈てきて、諸人を赦た、其せうこに八、その時きていた、着物のたもとを見ると、白い毛が二三本づゝ、はいつてある、なんと有がたひ事で八ないかと、咄をしている所へ、一ツの鯰が出て来てい八く

なまづ 今の lag の co が co が co たので八ない、アリヤ、おいらの仲間が co なのだ、

ナアニ、ばかア、い八つせへ、なまづ八人をくるしめるか、おどかすことよりしねへものが、どふしてどふして、放ってとまってであるなぞと 情が有ものか、今じや、親の敵だといつて、打殺される八、党にもの前るひうちにげて、行ッせへ行ッせへ

な サア、それだから、大 笑 だ、たとひ 鯰 にしても、千百万 寄ても、此 大地 が一分でも、うごくものか、地しんハ 陰陽の気 だ、ソレニ、 鯰 をわるくにくむから、そのわるくいハねへ、人ばかりを 赦 てやりやした

ハヽア、それじや、なまづにも、少 ハ 情 があるのう

な ソリヤ、おめへ、魚心あれバ、水心あり

神馬の白毛か?鯰の髭か? ところが、救済の証拠としての白毛を否定する地震鯰絵もある。「世直し鯰の情け」(図3-31)では、その白毛についての噂話をする人びとのところに一匹の地震鯰が来て、「白馬ではなく自分たちの仲間が救済を果たしたのだ」という。すると、「ひとを苦しめるばかりの鯰がどうして救済をするということがあるか」といい返されてしまう、というやりとりがこの絵には文字で記されている。一方で、この絵柄をみると、地震鯰は被災者の救助に励んでいる。

すると、地震鯰は、「地震は陰陽の気によるものだ」と述べて、地震鯰説を否定する。 鯰のことを悪くいわないひとばかりを助けたのだという地震鯰に人びとは、「それでは鯰 にも少しは情けがあるのか」と返すと、「魚心あれば水心ありだ」とオチがつく会話であ る。

笑いの中で、地震を起こすのは鯰なのか陰陽の気なのか、人びとを救済し「世直し」という世の再生を実現するのは、白毛を振りまく天照大神なのか、それとも地震鯰なのかといった掛け引きは解消されてしまう。絵をみれば、地震鯰が被災者を助けているのは一目で明らかであり、地震鯰絵のなかで天照大神の救済神としての位置は、まだ磐石とはいいがたいのである。

まとめ 地震鯰絵の中ではやはり、鹿島神への信心が主要であって、それに代わる天照大神への信仰が磐石の重みをもって表されていたとはいいがたいかもしれない。だが、鹿島神 地震鯰 要石という民俗や伝承がほとんど初めて図像化されたこの安政江戸地震をめぐっては、それが起きたのが 10 月の神無月だったということもあって、鹿島神に限られない神々がその絵の中に顕現したのである。

先にみた梵字を別な地震鯰絵の中にみれば、その梵字とは降三世明王、大威徳明王、 大聖不動明王、軍荼利明王、金剛夜刄明王のことだと記されている。複数の神仏を現さ なければならないほどの災いがこの地震により現出したのだし、それを祓うためには、 それほどの神仏の威力が必要となる出来事だったと、地震鯰絵は表しているのである。

さて、地震鯰絵はどのように震災という極限のともいえる危機をめぐる結末を告げるのだろうか。すでにみたように、震災下での人びとの救済にかかわる鹿島神や、それに 代わる最高神の顕現という表現があったのである。

地震鯰絵に限らずそのほかの安政江戸地震をめぐる記録には、地震が起きたとはいえ「ゆるがぬ御世」を祝福する文言が書き記されていた。その御世を統治するものは誰なのか、そうした諸記録は明示していない。

だが、地震鯰絵の中では、日本という国土の観念と、それにみあうような八百万神とその中でも至高神としての天照大神への信心と、そして、それらにかかわる国土安穏や護持されるべき「君が代」の君といった、地震後の世界に新しく構築されるべき秩序の展望が表現され始めたのである。

おわりに

地震鯰絵は、鹿島神 地震鯰 要石という民俗伝承を基として、更には、その構成要素をさまざまに組み替えることで、実に多様な表現を展開した。そこは、地震という出来事とその後の事態を、どのように理解し得心するかをめぐる想像力が雄飛する場だったといってよい。

地震をきっかけとして特定の人びとは、それを福の到来と祝福したのだったし、また、 そうした思いもかけなかった幸せを体験した非日常性ゆえに、地震後の日々において欲望や願望が解放されるような至福の中で、震災という恐慌からの復興へと状況を転換させようとした。

だが、地震鯰絵は、そうした世の再生を享受できるような地震後の日々においてなお、 人びとの日常においても掲げられていた慎みや倹しさや、勤勉や仁徳といった道徳規範 をあらためて指示したのだった。地震後の日々において、世の再生を展望させながらも 回帰すべき日常の規範が、地震鯰絵の中には示されていたのだった。

たとえ、世の再生が展望でき、それを人びとが祝福しあえたとしても、地震を災いとしてしか体験できなかった人びとも多い。それは、身内の者を亡くした遺族や、被災したことにより死んでしまった者たち自身である。世の再生を享受するのであれ、日常への回帰を実践してゆくのであれ、いずれにしても、地震後の日々と生きるものたちにとって、死者への鎮魂と慰霊もまた欠くことができない実践として、地震鯰絵は指示していた。

繰り返せば、地震鯰絵を構成する鹿島神 地震鯰 要石という要素は、こうした組み合わせがほとんど初めて図像化されたこの安政江戸地震後の世において、多様な組み換えが可能なことがまた表されたのである。そのとき、この地震が起きた 1850 年代半ばという時代が意味を持つこととなる。すなわち、繰り返される大地震、そして前代未聞の異国船の江戸湾侵航が、地震が起きた範囲を江戸 4 里四方あるいは 10 里四方と表すことを遥かに超えて、地震をきっかけにナショナルな領域への覚醒を人びとに促したのである。

安政江戸地震は、ペリーが率いる黒船来航という異変の直後といってよいときの出来事であり、また、地震から十数年後には維新という動乱が起こる。そうした時代状況ともかかわって、人びとの生活経験の蓄積としての民俗が大きく変容しようとする要因や契機となった出来事が、この安政江戸地震だった。また、その変容は、震災後を生きる人びとの日常回帰という願望や実践ともかかわるがゆえに、より深部から人びとの生活世界を変容させる可能性を開いたのではないだろうか。

(なお、地震鯰絵を掲載するにあたって、できるかぎリルビもふくめて原典から引用を 行った。場合によっては、高田衛ほか監修『鯰絵』(里文出版、1995 年)に収録された 「鯰絵総目録」を参照した。また、本文では、原文のルビを活かしつつ、読みやすくするために、筆者でルビをふった場合もある)

【参考文献】

アウエハント、コルネリウス / 小松和彦ほか訳 (1989):『鯰絵』せりか書房

阿部安成(1997):「鯰絵というテキスト、解釈としての鯰絵」『民衆史研究』53

(2000):「鯰絵のうえのアマテラス」『思想』912

(2000 - 2001):「国芳という戦場」『彦根論叢』327、328、330

(2004):「震災 という歴史への問い」

『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』37

応地利明(1996):『絵地図の世界像』岩波書店

気谷誠(1984):『鯰絵新考』筑波書林

加藤光男(1993):「鯰絵に関する基礎的考察」『埼玉県立博物館紀要』18

北原糸子(2000):『地震の社会史』講談社

(2003):『近世災害情報論』塙書房

小島瓔禮(1996):「鯰と要石」「民俗学論叢」11

富沢達三(1996):「「鯰絵の世界」と民衆意識」『日本民俗学』208

(1996):「幕末風刺画と鯰絵」『歴史民俗資料学研究』2

(2001):「時事錦絵としての鯰絵」『史潮』新50

南和男(1997):『江戸の風刺画』吉川弘文館

宮崎ふみ子(2004):「動乱の中の信仰」井上勲編『開国と幕末の動乱』日本の時代史 20、 吉川弘文館

宮田登(1993):『江戸のはやり神』筑摩書房

吉原健一郎(1978):『江戸の情報屋』日本放送出版協会

河鍋暁斎記念館(1986):『鯰絵』

鹿島町企画課(1987):『なまず絵展』

埼玉県立博物館(1993):『鯰絵』

千葉県立大利根博物館(1994):『鯰百話』

高田衛ほか監修(1995):『鯰絵』里文出版

土浦市立博物館(1996):『鯰絵見聞録』

古河歴史博物館(1999):『天変地異と世紀末』

地震鯰絵を遡る

地震鯰絵に描かれる、鹿島神、地震鯰、要石の組み合わせは、いつころ成立したのだろうか。俳諧にかかわる語群をみると、鯰と琵琶湖の竹生島、あるいは鯰と竹生島や弁財天、地震、瓢箪とのつながりは17世紀後半に遡るという。また、寛文2年(1662)に琵琶湖西岸の地震後につくられた記録である、「かなめいし」(『仮名草子集』新編日本古典文学全集64、小学館)には、昔のひとの俗歌として、「揺るぐとも よもや抜けじの 要石 鹿島の神の あらんかぎりは」という、要石と鹿島神をめぐる歌が記されている。この歌は、たとえ地震が起こったとしても、鹿島神がしっかりと要石の機能を働かせていれば、地震が大きな災いをもたらすことはない、という内容だと理解されている。ただしこの17世紀前半のころは、大地を揺るがすがゆえに要石を打たれているものは、竜だったり蛇だったりした。寛永元年(1624)の「大日本国地震之図」で日本を取り巻くのは、竜とも蛇ともみえるものとなっている。さらに、地震鯰絵に描かれる3者のうちの2つの組み合わせとして、鹿島神が地震鯰を押さえる、あるいは地震鯰を押さえているのが要石だ、という伝承ならば14世紀にまで遡るという。

こうした伝承の歴史を持つ、民俗としての鹿島神 地震鯰 要石というつながりだが、 それが地震鯰絵という図像となったのは、この安政江戸地震がほとんど初めてとなる。

嘉永 6 年 (1853)の小田原地震をめぐる図像である「相州箱根山小田原御城下大地震之図」には、さきの「揺るぐとも」よもや抜けじの「要石……」の歌が「鹿島大神宮御歌」として記され、鹿島神が地震鯰を要石で押さえる絵も載せられている。ついで、弘化 4 年 (1847)の善光寺地震をめぐっては、女性と鯰と阿弥陀如来の3 者で構成された図像(図「かわりけん」参照)がつくられている。ここでは鯰の髭を阿弥陀如来が引っ張っている。同様の絵柄の別な錦絵をみると、そこには文字で「阿弥陀に地震が叱られた」と記されているのだから、地震を起こす鯰を阿弥陀如来が押さえ込むという表現となっている。

元号でいうと弘化、嘉永、安政となる 1840 年代末から 1850 年代半ばにかけて、日本列島はあちこちで大きな地震が発生していた。繰り返される大地震を通して、この安政江戸地震のときに、地震とその後の事態を理解するために参照された民俗伝承をふまえて、鹿島神 地震鯰 要石という組み合わせが、大量の錦絵版画となって登場したのである。

こうした錦絵版画流行の背景に、「源頼光館土蜘蛛作妖怪図」(1843年)などの風刺画で知られる、歌川国芳の存在が想定されている。(阿部安成)



図 地震火災版画張交帖 地震鯰絵「かわりけん」 (東京大学総合図書館所蔵)

コラム

地震と鯰の故事来歴

「地下深いところに住んでいる大きな鯰が、からだを動かすときに地震が起きる」と、 昔の人は本気で信じていた。

地震の原因論としての鯰説が脚光を浴びたのは、江戸時代後期のことで、とくに安政江戸地震のあと、大量のかわら版とともに、さまざまな鯰絵が世に出まわったことは、よく知られている。

では、地震と鯰とは、いつごろから、どんなかたちで結びつけられたのだろうか。

実は、鯰が登場するよりもはるか前に、人びとは、地震に関連づけて、いろいろな動物を思い描いていたようである。

たとえば、12 世紀末の建久年間につくられたとされる暦には、龍のような姿をした奇怪な動物が諸国を取り巻いていて、「地震虫」と名づけられている。鎌倉時代には、すでに地震と動物とのかかわりを示す考えのあったことを窺わせるものである。

現在知られているかぎり、鯰と地震とが、はっきりと関連づけて記された最古の文献は、 豊臣秀吉の書簡である。秀吉は、その晩年、京都伏見に豪華な城を築くことを計画した。 城の普請に着手したのは、文禄元年(1592)のことだったが、このとき秀吉は、京都所 司代に宛てた書簡に、「ふしみのふしん、なまつ大事にて候まま」と記している。「なまつ」 はもちろん鯰のことであり、「なまつ大事にて」というのは、地震対策をぬかりなくしてほ しいという意味だったのである。

こうして完成した伏見城に秀吉が入城したのは、文禄3年(1594)夏のことだったが、 秀吉の当初の懸念は不幸にも的中して、2年後の慶長元年(1596)に発生した京都直下 地震により、天守閣は大破し、伏見城内で数百人の死者がでる災害となったのである。

鯰と地震とのかかわりは、松尾芭蕉の作品にも登場する。

延宝6年(1678)に出版された「江戸三吟」のなかに、当時桃青と号していた芭蕉が、 弟子の似春と詠んだ次のような連句が載っている。 大地震 つづいて龍や のぼるらん (似春)

長十丈の 鯰なりけり (桃青)

似春が、大地震を昇竜にたとえて美化したのに対して、芭蕉(桃青)が、龍ではなく、 鯰であると茶化したものと思われる。

この「江戸三吟」が出版される前年の延宝5年(1677)10月、房総沖の日本海溝を 震源として巨大地震が発生し、沿岸部に大きな津波災害をもたらした。江戸も相当な揺れ に見舞われたはずなので、こうした連句がつくられたのではないだろうか。

元禄3年(1690)、長崎出島のオランダ商館付き医師として来日したドイツの博物学者 エンゲルベルト・ケンペルは、2年間の日本滞在を回顧して著した『日本誌』のなかで、 「地震は、大きな鯨が地下を這い歩くために起こると、日本人は言っている」と述べてい る。これはおそらく、地震を起こす動物として見せられた大鯰の絵を、ケンペルが鯨と思 いこんだものであろう。

このようにみてくると、すでに 16 世紀末から 17 世紀にかけて、地震鯰説は、かなり世に広まっていたと推定できるのである。

鯰絵が印刷物として大量に出まわるようになったのは、19世紀半ばのことである。とくに安政江戸地震のあと、鯰絵が爆発的に世に出た事実は、19世紀前半に西洋から新しい印刷技術が導入された点と、時代的にもほぼ符合している。

鯰と地震とが密接に関係していると思われてきた背景には、たぶん昔から、地震の前に 鯰が異常な行動をしたという事例が伝えられていたからであろう。

現実に、安政江戸地震の前にも、鯰の異常な行動が見られたという報告が、『安政見聞誌』に載っている。要約すれば、「本所永倉町に住む篠崎某という人が、10月2日の夜、数珠子という漁具を使って鰻を獲ろうと、川筋ところどころを漁ったのだが、鯰ばかりが騒いで、鰻は1尾もとれず、鯰3尾を釣り上げてから、はたと気がついたのは、鯰の騒ぐときには、必ず地震があるという言い伝えだった。これは大変と家に帰り、家財道具をすべて庭に持ち出して異変に備えたところ、その夜ほんとうに大地震が起こり、家は潰れたものの、諸器物は救われた」という話である。

これが実話なら、地震の起きる数時間前に、川底の鯰が敏感になり、活動的になっていたということが推測される。

1923年関東大地震の際にも、東京向島のある池で、数日前から鯰がさかんに跳ねたとか、地震の前日に神奈川県鵠沼の池で、鯰がバケツに3杯もとれたという話がある。

なぜ地震の前に鯰が活動的になるのかについて、よく言われるのは、地中を流れるかすかな電流(地電流)を、鯰がいち早く感知するのではないかということだが、科学的な実証が十分になされているわけではない。(伊藤 和明)

コラム

佐久間象山の地震予知器

安政江戸地震の発生する前には、さまざまな異常現象のあったことが、庶民からの報告 として古文書に記されており、大地震の前兆をさぐるうえで興味深い。

動物の異常行動についてみると、地震の前に鯰が騒いだとか、群れていた雀が急に姿を消したとか、鶏が家の梁に上がってしまったとか、あるいは、冬眠したばかりの蛇が、地震の2日前にぞろぞろと姿を現したというような記事が見受けられる。

地下水の異常についての報告もある。浅草御蔵前通りの水茶屋で、地震の数日前、地面のくぼんだ所を杖でつついたら、水が湧きだしてきた。驚いた茶屋の主人がまわりを掘ると、水がどんどん噴きだして泉のようになったという。また、深川で井戸掘りをしていた人が、さかんに地底が鳴るので気味悪く思い、仕事を早めに切りあげて帰宅したところ、その夜大地震が起きたという話もある。

電磁気現象とのかかわりで謎が深いのは、『安政見聞誌』に記されている浅草の眼鏡屋の話であろう。「浅草のある眼鏡屋で、店の看板として、3尺あまりの磁石を店先に展示してあったが、地震の起きる2時間ほど前、磁石に吸いつけてあった古釘や古錠などが、皆とつぜん落ちてしまった。店の亭主はたいへん驚いて、鉄を吸わないのであれば、ただの石ころにすぎない。きっと多くの年月を経たので、その気が薄らいだのだろう。これは大損害だと嘆いているところへ大地震が起きた」というのである。

つまり、地震の発生前に磁石がとつぜん磁力を失ったらしいということになる。この現象は、現代の科学でも解明がなされていないのだが、当時、これをヒントにして、磁石を利用した地震予知器がいくつか作られたという。

なかでもよく知られているのは、佐久間象山が安政 5 年(1858)に製作した「人造磁 玦(じけつ)」と呼ばれるもので、全長 12 センチの馬蹄形磁石の先端に鉄片を吸いつけて あり、鉄片からは数個の鈴を入れた袋が紐で吊りさげられている。もし地震の直前に、磁 石が磁力を失って鉄片が落ちれば、鈴が鳴って人に知らせようという工夫がなされていた。

しかし、これによって地震を予知したという話は聞いていない。地震現象の解明そのものが進んでいなかった時代なのだから、無理からぬことである。あえていうならば、これが日本の「地震予知事始め」ということになろうか。

象山の作った人造磁玦は、いま長野市松代の象山記念館に保存陳列されている。(伊藤和明)

コラム

メディアとしてのかわら版

メディアとは、ラテン語の medium(中間)から派生した言葉で、ヨーロッパでは、16世紀頃から使われ始めたという。初めの頃は、現在のような伝達作用を媒介するものに限られることはなく、神と人間、あるいは精神と世界を結び付ける作用をするものにも使われた言葉だという(『情報学辞典」』)。新聞やテレビなどのマス・メディアが支配的な存在になって、コミュニケーション媒体を指す言葉に限られるようになったという歴史をもつ。わが国のかわら版の歴史においても、こうした流れを読み取ることができる。

かわら版とは、そもそも、公式な手続きを経ずに出された、なんらかの情報を伝える出版物を指す。江戸時代、かわら版のはじまりとされるのは、大坂夏の陣(1615)の摺物である。しかし、当時のオリジナルはなく、現在残されているものは、19世紀初頭の模刻版ばかりであるから、偽作説が出るのも故なしとしない。

かわら版が伝える情報は、事件か、事故、あるいは災害などであるが、事件を事件と感ずる人びとがいなければ、世にかわら版は登場しない。その意味で、現在に残されているかわら版は、明和9年(1772)の江戸大火、あるいは天明3年(1783)の浅間山噴火など、18世紀の後半頃発生した大災害を伝えるものからである。この後、1世紀も経ない安政江戸地震(1855)の頃になると、繋だしい量のかわら版が出版された。

また、それに託されたメディアとしての役割も地震の被害箇所を伝える報道色の強いもの、地震鯰絵にみるような言葉遊びや地震除けのお守り、あるいは神々に地震を鎮めることを願う祈りを籠めたものなど、現在では類推しがたいほど変化に富んでいる。

安政江戸地震の時に出版されたかわら版は、災害発生の翌々日 10月 4日から市中に出回った(笠亭仙果『なゐの日並』)が、その勢いは止むことを知らないほどであった。しかし、時は封建時代、自由な出版活動が許されているわけはなく、災害に関わるものについては大目にみられていたとはいうものの、政治向きのことに触れたものや、幕府に問題視されたものは厳しい検閲の目を逃れることはなかった。

地震発生から 2 か月を過ぎた 12 月中旬、草子類の出版、販売を扱う絵草紙屋の元締めたちに何度かの警告、罰金を課しても止むことがない違法出版に対して、幕府は版木没収という最終手段に出た。この時、87 人の版元から集められた版木は 328 枚にのぼったと

いう。しかし、当時、地震のかわら版で名を馳せた仮名垣魯文は、これに懲りずに、翌年3月、かわら版を織り込んだ『安政見聞誌』を発刊、発禁処分となった。検閲の目が緩むことはなかったのである。(北原糸子)